

## 左川ちか年譜稿

### The Draft of Sagawa Chika Chronological History

島田 龍\*

#### はじめに

詩人左川ちか（1911～36：本名川崎愛）死後に出版された『左川ちか詩集』（伊藤整編、昭森社、1936年11月）には、兄の川崎昇がまとめた「左川ちか小伝」が収載されている。十数行の年譜である。その後、小松瑛子による評伝「黒い天鵝絨の天使—左川ちか小伝」（『北方文芸』1972年11月）が著された。

さらに川崎昇らの協力を得た『左川ちか全詩集』（森開社、1983年11月）の小野夕馥編「年譜」、ついで『江古田文学』「特集天才左川ちか」のクリハラ再編「左川ちか略年譜」（2006年11月）が作成。徐々に緻密さを増してきた。

小松による評伝から半世紀近く経った現在、伝記的研究は大きくは更新されていない。稿者はこれまで左川ちかに関わる文献や同時代の資料を収集調査し、伊藤整との関わりを文学史の観点から考察してきたが、その過程で多くの伝記的事実を確認するに至った。これまでの調査成果の一部をまとめた本稿では、北海道時代の事跡などいまだ不十分で全体に錯誤もあるだろうが、文学者との多様な交流などあまり知られてこなかった事実を新たに検証し直した。

早逝の天才女性詩人という神話的表象以前、同時代の詩人左川ちかと人間

---

\* 立命館大学人文科学研究所客員研究員

川崎愛の実像に迫る一歩としたい。

およそ年譜というものが叙述する側によって取捨選択された構築物であることを思えば、稿者の関心に引き寄せた構成になったことも否めない。備忘録を兼ねているため読みにくい点多々ある。その点も含め、典拠とした文献を可能な限り明示し、今後の研究に広く資するよう心掛けた。読者・研究者の叱正を乞いたい。

## 凡例

- 一、各年号に付した年齢は、当該年2月の誕生日満年齢による。
- 一、本人に関する直接の事項は◆で、著作関係は◇で、関連事項は△で分類した。推測や補足説明は※で示し、必要に応じ関連資料を引用した。
- 一、典拠文献は略記し、詳細な書誌は文末にまとめた。ただし地元資料・学校文書などでプライバシーに関わる資料、非公開を前提とする資料は今回資料名を伏せた。
- 一、伊藤整『若い詩人の肖像』、小松瑛子「黒い天鵝絨の天使 左川ちか小伝」、曾根博義『伝記伊藤整』、江間章子『埋もれ詩の焰ら』、伊藤礼『伊藤整氏 こいぶみ往来』、山森三平『想像する旅』、島田龍「左川ちか研究史論」「海の詩人 伊藤整と左川ちか」などの長文資料は、典拠頁数を付した。

## 【川崎家】

△川崎家はちかの祖父長左衛（エ）門（1838・天保8年7月生）、祖母ハナ（1844・天保14年3月生）との間に1男5女。長左衛門の長男は久五郎（1868・明治元年4月生）。次女チヨ（1878・明治11年2月生）がちかの母。

△家伝によると、川崎家は越前出身の廻船問屋の末裔で、九右衛（エ）門の

三男長左衛門の代には余市に20町歩（約6万坪）ほどの田畑を所有する地主であったという（小松瑛子1972Ap64、『左川ちか全詩集』「年譜」）。

※小松1972Aには「信州の庄屋」とあるが、内田忠宛左川ちか書簡1932年2月から越前と判断する。

※北海道庁後志支庁の『未開地貸付台帳』によると、1894・明治27年から6年計画で余市郡黒川村大字登の原野2万1千坪を国より黒川村番外地の川崎久五郎に貸し下されており（6年後に払下され私有地に）、実際に川崎家は広大な土地を有していたことが確認できる。

#### 【1896年】（明治29）

△4月1日 従兄川崎喜代治が黒川村番外地に川崎久五郎とヨシの長男として生まれる。建築技師。1927年2月に札幌建築社を創設。北海道初めての建築雑誌『北門建築』（のちに『家』と改題）を刊行し、弟の川崎尚や伊藤整の作品を掲載した。1929年に北海道青年協会を組織、理事に就任。機関誌『北方青年』を刊行した。また社会民衆党札幌支部創設に関わり戦時中は特高に監視されていたこともある。農学に関心が深く中国で華北種苗協会幹部。戦時中、華北種苗協会及びその関連団体には弟の尚、従弟の川崎昇、知人の伊藤整も籍を置き貴重な収入源とさせていた（伊藤整『太平洋戦争日記』）。戦後は衆議院選挙や余市町長選挙に立候補。小樽市議会議員（2期）。主著『北海道青年団大鑑』（1931年）、『北海道に於ける優良青年団』（1932年）、『非常時代の解剖』（1933年）、『内閣を衝く 政界秘話』（1935年）、『山林に自由あり』（1977年）など。筆名「佐藤一雄」「川崎正明」。『現代札幌人物史』（1931年）、『特高外事月報』（1936年）、『小樽紳士録』（1949年）他参照。

#### 【1904年】（明治37）

△4月20日 兄川崎昇、余市町大字黒川村番外地に川崎チヨの長男として

生まれる。父は不詳。昇の名は登地区に由来し、祖父が命名。家伝によれば、祖父は1905年の登尋常小学校（現余市町立登小学校）創立に資金を寄付したという（小松1972A）。

△5月20日 従兄川崎尚<sup>ひさし</sup>が黒川村番外地に川崎久五郎とヨシの三男として生まれる。のち田居尚。詩歌人。伊藤整や川崎昇たちと雑誌『青空』などの文芸活動に親しむ。本名の他に筆名「川崎比佐志」「田中兼通」。歌人小田観螢に私淑。上京し、『信天翁』などで創作活動に励む。日大卒業後、銀座松屋のビル8階にあった徴兵保険会社本社に就職。1930年4月に札幌支社に移り、小樽稲穂町の呉服屋の娘田居スエと結婚し田居と姓を改める。その後、小樽新聞（現北海道新聞）の文化部長などを務めた。晩年は東京都三鷹市に暮し、武蔵野学園園長。能楽論など文筆活動が続けた（武井静夫1975p27、曾根博義1977p472他）。主著『むらぎも』（1924年）、『「青空」と伊藤整』（1975年）、『信天翁』（1976年）、『蘇春記—素膚の伊藤整—』（1976年）、『義経の生涯—能楽義経像』（1978年）

△11月27日 祖父長左衛門、死去。66歳。これに前後して借金の保証人となり土地を手放すことになった伯父久五郎を家長とする川崎家は、同年12月2日に余市の登番外地に本格的に移転。林檎など果樹園農業に従事した（武井静夫1975p28・36。登地区資料）。

### 【1905年】（明治38）

△1月17日 伊藤整、北海道渡島国松前郡炭焼沢村（現松前町）に伊藤昌整と鳴海タマの長男として生まれる。翌年4月に塩谷村（現小樽市塩谷）に転居。整自身は長く1月16日が誕生日と信じていた（曾根博義1977p64）。

**【1911年】**（明治44・0歳）

◆2月14日 北海道余市郡余市町大字黒川村字登番外地（現余市町登町1682・83・85、1726番付近）に川崎チヨの長女として生まれる。本名「川崎<sup>ちか</sup>愛」。7歳年上の昇とは異父兄妹となる。親しい人からは「あい」と呼ばれることもあり、「愛子」とも表記された。戸籍上の父はおらず不詳。妹キクによれば僧侶であったというが、ちかは父の顔を知らなかった（小松1983）。

「その路をゆく人影は私の父ではあるまいか。呼びとめても振り返へることのない背姿であつた。夜目にも白く浮んでゐる雪路、そこを辿るのは二度と帰ることをゆるされないやうに思はれる。」（詩「冬の肖像」1932年4月）

△母チヨ、叔母ウメ、兄昇ら女系の親族は熱心な金光教信者だった。とくにウメは金光教会長石倉イシを支え、余市の金光教布教に中心的な役割を果たした。娘は俳優河野秋武夫人（衣斐千代1986、金光教北海道布教史編集委員会1991）。川崎家はもともと真宗大谷派に属し、伯父久五郎らの家はそのまま真宗の檀家であった。

「彼には若い修行僧か宗教家のような感じがあった。私はまだ知らなかったが、彼には金光教にこった叔母さんがいて、その頃彼もまたその信者であり、教会へ通っていたのだった。」（伊藤整『若い詩人の肖像』1956Bp43）

△4月 川崎昇と尚、登尋常小学校に入学。昇は他人の土地を通らずに通学できたという（小松1972A）。尚は各学年で総代を務める（登地区資料）。

◆この年 間もなく同町黒川村22番地（現余市町黒川町13丁目105番付近）

に転居か。土地の所有者は叔母ウメで同居した可能性がある。同地は明治初年に旧会津藩士が入植、「会津長屋」と呼ばれた粗末な小屋が並ぶ地区だった。

**【1914年】**（大正3・3歳）

△2月 母チヨが久五郎家より分家。翌年12月にはチヨの妹ウメも分家。

**【1915年】**（大正4・4歳）

◆幼時期から虚弱。肺炎に罹りその後遺症で4歳頃まで自由な歩行も困難なほどであった。

△この頃 伯父川崎久五郎家も長男喜代治を残し、登から黒川町に転居。従兄尚は大川尋常小学校（現余市町大川小学校）に転入（武井1975・登地区資料）。

**【1916年】**（大正5・5歳）

◆9月7日 母チヨがキクを生む。父は隣村仁木村の佐々木善左衛門。昇・愛とは異父兄妹。

◆母について。

「母は歌ふやうに話した／その昔話はいまでも私たちの胸のうへの氷を溶かす」（詩「言葉」1934年12月）

「自分たち兄妹の、かなしい生い立ちを話して聞かせた。そこに登場してくるのは、生母であるひとりの女性だった。そういうことを話しているときでも、左川ちかは、とくべつ気持ちをたかぶらせることもなく、と

つとつと話し、話し終ると、『嘘だと思うかもしれないけれど、私が言ったことは、本当のことなの』と、さびしく微笑んだ。」(江間章子 1984p15)

「私たちきょうだいは、兄と私だけでないの……まだ妹たちもいるの……みんな父がちがうのよ……あなた、父がちがうきょうだいの気持ちってわかる？(略) めがねパンは、子供が大好きなものよね……子供には値段が高くて、めったに買ってもらえないものだったのよ……それを、母が沢山買って、私たちにくれる……兄は小学生だったけれど、事情がわかるのね……母がお嫁に行くということが……兄は、めがねパンを地面に投げ捨てて……母が乗った人力車を、泣きながら追いかけたものよ……そんなことが、なんべんもあったわ……母も運がわるかったのね……なんべんもお嫁に行かなければならないなんて……北海道って、そういう土地かもしれないわ……兄は、とても私のことを心配してくれるのよ…居候の私のことを。」(江間 1985p41 ~)

### 【1917年】(大正6・6歳)

◆この年 川崎家、様々な事業に手を出し、株式相場が暴落しさらに没落した。多くの土地が人手に渡り、第一次世界大戦の影響による米価の値上げもあり、川崎家の経済事情はたちまち悪くなった。

「木の切株にあがつて、盲縞の袴に羅紗のマントを着た男が蝙蝠傘を杖にして、大勢の子供や大人に取り囲まれて威張つてゐる。『コノ気狂奴ガ、キサマタチハ知ツテキルノカ、コノ道路ガイツ出来タノカ、コノ擧ノ歳ハイクツナノダ。オレガナ、オレガナ、大正六年ノ好景気ノ時ニ、サウダ、相場ニ失敗シナカツタナラ、ナポレオンガコーカサスニ来タトイフコトヲ聞イタノデハナイ。オレノ舎弟ハ二千町歩ノ田地ヲモツテキタ。ソレナノニ米ハ高イ。笑ツテキルナ、イマニキサマタチハ、コロソ

デシマフゾ ha ha ha ha ha……』なんといふ冷たい叫びだらう。菌の  
見えない口中が真赤にただれてゐた。」(詩「三原色の作文」1935年2月)

◆この年 母や兄と別れ、中川郡本別村(現本別町)の叔母のもとに預けられる。当時、本別は第一次世界大戦の影響で豆・でんぶんなど雑穀景気を迎え、人口が急増していた。

△3月 川崎昇と尚、大川尋常小学校を卒業。ともに余市尋常高等小学校(現余市町立黒川小学校)進学。1919(大正8)年3月24日に卒業。

◆4月 本別尋常小学校(現本別町立本別中央小学校)入学。第18回生。田中清六校長。同級生に本別家政専門女学校(旧十勝女子商業学校)校長となる満仁崎賢次がいた。

**【1920年】**(大正9・9歳)

◆本別時代、ちかは和裁を叔母にならった(小松1972A)。

「一番夢をもたなければならぬやうな子供時代の現実の生活が私にとつてあまりに失はれ過ぎた、少しばかりみぢめだと思へるやうなことばかりだつたので、こんな風に人の眠る時間でも私の心は起きて、自分で夢を造り、それを最も自然らしく愛したり楽しんでゐたりしたかつたのでせう。そして夢の中にだけ私が住んで、笑ひ、空想し、そこから一歩も外へ出ることが出来ないやうにしていたかつたのです。」(散文「童話風な」1935年3月)

△4月29日 祖母ハナ死去。76歳。



**【1921年】**（大正10・10歳）

◆本別尋常小学校4年生。寺島寿門校長。担任は天野ツギ。天野剛村長の娘で女学校を卒業したばかりだった。着物は銘仙で紺の袴に白足袋。美人で男子生徒たちからよく悪戯をされていたという（満仁崎賢次1972）。

△6月13日 伯父川崎久五郎、尚たちは余市から札幌区豊平町5番地に移住する（登地区資料）。母川崎チヨは余市に残り、登に林檎園などわずかな土地を所持していた（北海道庁後志支庁1921）

△この頃 伊藤整、川崎昇と知り合う。

**【1922年】**（大正11・11歳）

△1月 伊藤整、川崎尚と昇らの同人雑誌『青空』5号に初めて短歌を寄稿し「弟病める日」掲載（曾根1977p181～）。

△4月 伊藤整、小樽高等商業学校（現小樽商科大学）に入学。1年上級に小林多喜二・高浜年尾がいた。

**【1923年】**（大正12・12歳）

△年月不明 母チヨ、妹キクを連れ余市に戻る（山森三平1989p23）

◆1月20日 ちかは余市町立大川尋常小学校に転校。母を家長として兄、妹との生活が始まる。

※大川小学校の9年上級にアイヌ詩人遠星北斗（1901年生、1914年卒業）。2年上級に詩人和田徹三（『椎の木』同人、1909年生）がいた。和田は1916年入学～1919年転校。筆名「笹川亮」「龍木煌」。当時の教員奈良直弥、校医山岸礼三は遠星北斗との関わりが深い名士。

前年11月、現在地に校舎が新築移転。担任教員は富谷敬蔵（のち中目名小学校長）。中村重次郎校長（明治44～大正2、12～15年校長）。自由主義教育を信奉する中村が提唱する「大川学習法」（自学自習、討論形式、習熟度別編成、自由作文・生活綴り方教育）は、奈良師範附属などの教育法を改良したもので、その実践校として全道に名を馳せた。「大川学習法」がまず試験的に導入されたのがちかの学年であった。

◆3月 学籍簿は各科目85点以上、操行は甲で成績優秀のまま大川尋常小学校を卒業。卒業台帳には2月13日生とある。クラスで根上律、小林次子、奥村りゑと仲良しになり、のちに4人組といわれた（小松1972Ap65）。根上家は余市の名家で、律の姉シゲルはのちに伊藤整の恋人となる。兄義雄は函館西高校の音楽教師で北島三郎の恩師。弟博は1936年ベルリンオリンピック水泳選手。小林によればちかは色が浅黒く、どうみても健康そうな様子にはみえなかったという（小松1972Ap65）。

◆春 母と兄昇に気遣われながら、北海道庁立小樽高等女学校（現小樽桜陽高校）の受験勉強に勤しむ。

「入学<sup>いり</sup>たさの 一途<sup>い</sup>ころか 夜更<sup>よ</sup>まで 妹は机に 向<sup>む</sup>きて起<sup>お</sup>をり」「時折の 咳<sup>せき</sup>をのかさず 臥床<sup>ふしど</sup>ゆ 母は優<sup>やさ</sup>しき 声<sup>こゑ</sup>かけにけり」「咳<sup>せき</sup>ひとつのがさず床<sup>とこ</sup>ゆ 声<sup>こゑ</sup>かくる 母は子<sup>こ</sup>のため 未<sup>ま</sup>だねむらず」「開<sup>ひら</sup>きたる 学校<sup>がっこう</sup>の本<sup>ほん</sup>に 面<sup>おもて</sup>を伏<sup>ふ</sup>し 疲<sup>つか</sup>れしなべに 妹<sup>いもうと</sup>はねむれり」「日<sup>ひ</sup>を積<sup>た</sup>める 予<sup>よ</sup>習<sup>じゆ</sup>のつかれ すべ<sup>すべ</sup>なしや 炬<sup>たき</sup>燧<sup>び</sup>にうつ伏<sup>うつぶ</sup>し 妹<sup>いもうと</sup>は寝<sup>ね</sup>る」「しかすかに 入学<sup>いり</sup>たきものか 身<sup>み</sup>の弱<sup>よわ</sup>さも 思<sup>おも</sup>ひになけん 予<sup>よ</sup>習<sup>じゆ</sup>する妹<sup>いもうと</sup>」「本<sup>ほん</sup>に伏<sup>ふ</sup>し 今<sup>いま</sup>は疲<sup>つか</sup>れの 寝<sup>ね</sup>につける 妹<sup>いもうと</sup>が愛<sup>あい</sup>しさに マント<sup>まんと</sup>きせけり」「汽<sup>き</sup>車<sup>しや</sup>軌<sup>き</sup>を 歩<sup>あ</sup>みつ 今<sup>いま</sup>朝<sup>あ</sup>のあた<sup>あ</sup>たかさ 砂<sup>すな</sup>利<sup>り</sup>のあ<sup>あ</sup>ひより 草<sup>くさ</sup>萌<sup>も</sup>へにけり（或<sup>ある</sup>日<sup>ひ</sup>）」  
（川崎昇「妹」1923年4月）

◆4月 庁立小樽高等女学校入学。第19回生。当時の校舎は現小樽市立菁園中学校。担任は西村イマ。根上律ら4人組は全員庁立小樽高女に入学。ちかの女学校進学には親族の強い反対があったが、小樽の貯金局に勤務していた兄昇が学費を負担した。

3つ編みにした長い髪をさらに2つに肩のあたりでゴムで結び、銘仙の長着に羽織を重ね、袴をはいて通学していた（小松 1972Ap66）。同級生に松竹楽劇部から流行歌手となる小林千代子。4年上級に詩人大野百合子（当時退学し上京中）。4人組の他、余市の渡部きみ、塩谷の伊藤八重（整の妹）、鷺沢繁、小樽の野沢郁といったグループでまとまっていた（曾根 1977p209）。

△4月 伊藤整、小樽貯金局へ通勤する川崎昇と通学汽車で一緒になり親しくなった。1月より川崎尚から昇に編集が移った『青空』に整は以前から寄稿していたが、夏に同人に加わった。

「彼のような若さで、彼のように静かに落ちついて、そして一言一言が人に与える感じを気にしながら物を言う人間を私は知らなかった。（略）彼の言い方を聞いていると、私は、これまで誰にもいたわれなかったような形でこの男にいたわれている、というような感じがした。私は最初から彼に引きつけられたのだ。」（伊藤『若い詩人の肖像』1956年 Bp39）

「それから後長い交際の中に、私は彼に迷惑をかけ、彼を悲しませ、困らせたことがあるが、私が文学をやって行く資格のある人間だという確信を私に与え続けることでは、彼は変らなかつた。世間が私を認めることと認めないことに関係なく、彼は一貫して私に確信を与える態度を持ちつづけた。私が芸術家であれば、私を発見したのは彼であった。（略）私は川崎昇の前にいる時だけ、私がそうありたいと思う詩人として振舞

うことができた。」(伊藤 1956Bp82・98)

◆春頃 ちか、兄昇の親友伊藤整を知る。

◆通学汽車では、いつも「昨日見た夢」の話を友人たちに聞かせていた。小指の短いことを運命に見立てて寂しがっていた(小松 1972Ap72)。毎年春先に線路脇に伸びる虎杖が車窓を叩き、車内に溢れる緑に目を痛め眼科に通院していた。

「小さい時からよく夢を見る方でありました。目が覚めてもそれらの幻覚を失ひたくないと大切に数へるやうにしてしまつておいて顔を洗つたり、髪を結んだりしてをりました。私の話といへば夢で見たことばかりなので、その頃、私の友達がまた夢のことなのねと云つては笑ひました。誰れの足跡もついてない雪の道を見たばかりの夢を語りながら通学した時のことを想ひ出しますけれど、毎日ずい分沢山の夢を見たものだと思います。」(散文「童話風な」1935年3月)

「かつて私の眼瞼の暗がりをかすめた、茎のない花が、いまもなほ北国の歪んだ路を埋めてゐるのだらうか」(詩「葡萄の汚点」1933年11月)

「少女の頃の汽車通学。崖と崖の草叢や森林地帯が車内に入つて来る。両側の硝子に燃えうつる明緑の焰で私たちの眼球と手が真青に染まる。乗客の顔が一せいに崩れる。濃い部分と薄い部分に分れて、べつとりと窓辺に残こされた。草で出来てゐる壁に凭りかかつて私たちは教科書をひざの上で開いたまま何もしなかつた。(略)眼科医が一枚の皮膚の上からただれた眼を覗いた。メスと鉗。コカイン注射。私はそれらが遠くから私を刺戟する快さを感じず。医師は私のうすい網膜から青い部分だけ

を取り去つてくれるにちがひない。そうすれば私はもつと生々として挨拶することも素直に道を歩くことも出来るのだ。」(詩「暗い夏」1933年7月)

◆この頃 川崎昇は貯金局が休みの日曜に、母と林檎園で働き妹の学費に充てていた。

「林檎葉剤は花時前にかくべきものなるに男手なき我家の我れ 日曜を待ちて開花に迫られたるなり即ち」「やすみ日は 朝とく出でて 母のみの 母と働く わが身の安けさ」「やすみ待つ 心はもとな 明日明日に 花開く程と 日の迫りたり」「開かぬに 撒布ねばならず ひと手には 委せ兼ねつつ 心はもとな」「この花の 開き間はなし 日の曇り 雨とはみれど 薬剤くすりを撒布る」「明日を待たず 花はチラホラ 目に見えて 心もとなく 薬剤を撒布る」「朝をとく 母と働く 裏畑の 林檎の花は 咲き満ちにけり」「さかり咲く 林檎の花と 朝霧にこもり鳴く 閑古鳥の いづこともわかず」「あさ緑 色に出でたる 落葉松の 生垣に匂ふ 香のよろしけれ」(川崎昇「日曜労働」1923年7月)

△9月1日 関東大震災。庁立小樽高女校友会・同窓会でも救恤活動が行われる(北海道庁立小樽高等女学校校友会 1931)。

△冬 川崎昇、小樽の花園町東3目の知人小林の一室を借り下宿。伊藤整が出入りする(曾根 1977p195・199)。

※曾根 1977には2丁目とあるが、『青空』13号(1923年4月)の奥付に従う。

△11月30日 花園公園（小樽公園）に新築の市立小樽図書館が落成する。

△12月 1925年3月頃まで瀧口修造が小樽に身を寄せ、小樽図書館に通う。1925年初めに庁立小樽高等女学校近くに姉2人と文具店を開いている（瀧口修造自筆年譜）。翌年5月には修学旅行の引率で宮沢賢治が小樽公園を訪れ、小樽高商なども見学した。

**【1924年】**（大正13・13歳）

△春 川崎昇、余市に残す母と妹を思い、「帰郷抄」を歌う。

「待ちらん うからの面を 画きつつ ぬかるみ深き 夜の道をゆく」「麦  
蕎の粉を 練る手を止め たちて来し み母の面に 言かけにけり」「吾の  
ため 母がなさけの 手打そば うからと共に 食ふべけるかも」「うから  
らと 共にいねたる 夜の床に 語り更かすも 母と子のわれ」「故郷の  
家を守り居る 母や妹を しのぶかり寝の 幾夜経にけん」他2首（川崎昇  
「帰郷抄」1924年4月）

△6月 東京大相撲小樽場所で来樽中の横綱常の花が庁立小樽高女中庭に土俵入り、全国的に話題になる（北海道小樽桜陽高等学校創立100周年記念誌部会2007）。

△庁立小樽高女では小川幸太郎校長（7月着任）と本間重教諭（卒業生）らが主導し、昭和初年まで様々な学校方針の改定（校訓、新校章・制服セーラー服・制帽、各種生徒指導規則、自由研究期間の設定他）が実施された（北海道小樽桜陽高等学校創立100周年記念誌部会2007p91、北海道小樽桜陽高等学校開校百十周年記念事業協賛会2016p49）。当時市内に4校あった女学校のなかでは真面目で勉強にも熱心な校風だった。1925年5月制定の校訓は「真面目、勤労、質素、親切、しとやか」。

△夏頃 川崎昇、小樽市稲穂町西6丁目2番地の質店衣斐千次郎方2階に転居。現在、旧衣斐質店が残る。衣斐夫婦は川崎家の親戚で、金光教の熱心な信者でもあった（伊藤 1956Bp55・235、曾根 1977p199）。7月、昇と整、小樽花園の公園通りに夜店を開き、高商石鹼と生花を売る。

「こころはづみ たまさか出づる ざれ言の 好まぬ人に 聞かれぬる  
かも」「ものを売ると 夜の巷に 見も知らぬ 人のまことに ふれに  
けるかも」「小夜更けて 人足あらく なりにけり 友とい対ひ 言う  
はなきかも」「店を閉め 諦め夜空の 月がさや 秘めねばならぬ こと  
のあるなり」（川崎昇「露店小情」1924年9月、一部）

△この頃 伊藤整は根上シゲル（律の姉）と恋愛関係に入り、翌年春に別れた。整はシゲルや別の女を昇の下宿に連れ込んでおり、衣斐千次郎から神様を祀っている部屋の真上でそのようなことはやめるよう抗議された（曾根 1977p206）。

△10月初旬 川崎昇が上京。小樽貯金局から東京新橋の貯金局に勤務。昇が思いを寄せていた少女に、上京前後に整が仲立ちをするも失恋する。昇と少女は小樽の金光教会で知り合った（伊藤 1956Bp40～・142～、曾根 1977p215～）。昇によれば、上京は整と示し合わせたもので、整の上京を見据え下宿等の準備をしていたという（小松 1972Ap66）。『若い詩人の肖像』に「彼に見捨てられた」とあるのは脚色か。

◆この頃 兄の昇上京後、ちかは通学汽車などで伊藤整とさらに親しく話すようになる。整が余市の川崎家をよく訪ね食事や果物を御馳走になることもあった（曾根 1972p512）。

「この年の春、汽車で通勤していた時に、川崎昇の妹の女学校の二年生の川崎愛子が、その友達の重田留見子の姉に当る根見子の噂を、無邪気そうに、しかし私の聞きたがっているのを知っているのではないかと思われるように、時々私に知らせてくれた。私はその事や、川崎昇の家の裏手の林檎園の花などを思い出し、重田根見子と最後に逢った晩の印象にそれ等のものを附け加えて、架空のシチュエーションを作り、次のような詩を作った。」(伊藤 1956Bp241)

※重田留見子は根上律の仮名。根見子はシゲルの仮名。『若い詩人の肖像』では恋愛の時期が事実と1年ずれている(曾根 1977p262～)。整の詩「林檎園の六月」は川崎家の林檎園をモデルにちかや根上律ら少女のイメージを歌う。詩作年は諸説あり。

「林檎園は ほうつと白く／りんごの花ざかり。／六月。／人気ない所に／蜘蛛は暇な巣を張り、／蓮や虎杖とんぐいは深く茂つて膝を埋める。／／僕はすんなりと かうして伸び上り／不思議な肉身と／あつい思ひの若者となつてから、／この春といふもの なぜか／あの頬のやうな花にまですぐ涙を誘はれるのだ。／／あゝ十四の少女は／それを何ごともわきまはず、／肌明るい十八の乙女は／一夜の涙で脹れた目を 朝に冷たく見張つて／林檎園を棄てた。／／あゝ ひとりよ。／ほのぼのと白く花が空を埋め／霧も濃く六月の昼が深まれば、／また私はこの橙色の身をもてあまして／林檎園に来て 歎いて もだへるのだ。／あゝ捕へがたく逃れて行つた／私の言葉をもう感じなくなつた姿。／冷たくて近寄れなかつた目よ。／／この花が散れば／それで夢のやうに過ぎた六月は経つてゆき、／それから先の世界では／たゞ狂ほしく私をめぐつて／緑へ緑へと季節が深まるばかり。」(伊藤整「林檎園の六月」)



「愛はまだ子供のくせに妙にませたところがあって、整とシゲルの関係に特別の関心を持ち、整の前でよく、律ちゃんのお姉さんが、律ちゃんのお姉さんがと、少しからかうような調子でいった。そういう時ふと整は、自分が愛の許しを得てその前でシゲルと恋愛をしているかのような感じに襲われることがあったようである。」(曾根 1977p221)

**【1925年】** (大正 14・14歳)

◆高女時代、英語・淡彩画・和裁が得意だった。マリー・ローランサンのような画風であったという。和裁は同級生の教材を手伝うほど。編み物が好きだったちかは、いつも編み目はずしほどいてばかりいた (小松 1983)。

◆高女時代、図画・作法教員で歌人でもあった本間重 (のちの小田観螢夫人、庁立小樽高女4回生) に目をかけられる。当時、同校では教員・生徒とも詩歌が盛んで、本間も短歌の指導にあたった。ちかも高女時代に詩歌の技術を学んだと思われる。

◆高女時代、苺が好物であったちかは、よく4人組で余市町登にあった川崎家果樹園まで歩いて行き、皆で食べていた。

「畠にすわりこむと、紅い苺を摘みながら無心にたべる。四人は笑いあい、真青な空にむかって、紅く染まった口をあけた。そんなとき、川崎愛は、三人のよろこぶ姿をみて、姉らしいふるまいをして満足気な表情であった。」(小松 1972Ap67)

◆少女時代、『青空』など家にある川崎昇や伊藤整たちの詩歌雑誌はみんな読んで暗記していた (山森 1989p34)。

## ◆登の果樹園と山並みについて。

「遠い峯は風のやうにゆらいである／ふもとの果樹園は真白に開花して  
 ゐた／冬のまの山肌は／朝毎に絹を拵げたやうに美しい／私の瞳の  
 中を音をたてて水が流れる／ありがたうございますと／私は見えない  
 ものに向かつて拝みたい／誰れも聞いてはゐない 免しはしないのだ  
 ／山鳩が貰ひ泣きをしては／私の声を返してくれるのか／雪が消えて  
 ／谷間は石楠花や紅百合が咲き／緑の木陰をつくるだらう／刺草の中  
 にもおそい夏はひそんで／私たちの胸にどんなにか／華麗な焰が環を  
 描く」(詩「山脈」1935年8月)

△7～8月 伊藤整、始めて内地(新潟、大阪、奈良、京都)を旅する。東京の川崎昇のもとへ立ち寄る。

## 【1926年】(大正15・15歳)

◆6月1～4日 庁立小樽高女創立20周年記念祝賀会・講演会・音楽会・運動会などを3日間にわたり開催。ちかは4日に奥沢水源地で開催された記念運動会のリレーで2等に入賞した(北海道庁立小樽高等女学校校友会1927)。

◆6月 4年生、函館方面に修学旅行か。ちかが参加したかは未確認。

◆6月28日 伊藤整、東京の川崎昇に詩稿と悩みを綴った書簡を出し、ちかについても触れる。詩稿は「憂鬱な夏」「悪夢」「寿に」「笑つてはならない」「落葉松の風」「悪い蛙」。

「また今日お手紙を頂いた。僕の手紙をまつた君が思はれて僕は胸が

いたくなる様だつた。ほんとうにすまなかつたと思つて。ほんとうに長いこと書かなかつた。君から手紙が来て葉書がきて、また手紙がきたまで。君の手紙をよむときの僕のうれしさがどれ程のものだかを知つてみながら。(略) みんなぼくは何をして暮してゐると思ふだらう。緑は濃くなるのに。読んだうちで君の考をきかしてくれ。たつた一人の読者の君の。尚さんにもよろしく。いちごがなつたら愛ちゃんとかへ御馳走になりに行かうと思つてゐる。」(川崎昇宛伊藤整書簡、市立小樽文学館 1999)

◆初秋頃 川崎昇が休暇をとり帰省。ちかと整の3人で雨の小樽市内を歩く。喫茶店「越路」に立ち寄り、整は昇に第一詩集の題を相談する。翌日、余市の川崎家林檎園で昇は整に、『雪明りの道』よりも『雪明りの路』がよいと助言した(山森三平 1989p27)。

「この友達に、何か一番大切なことを語りたい、と考えていた。そして彼に詩集の題を相談するということに思いついた時、私は嬉しかった。二十歳頃の友情というものには、恋愛に似た心の動きがあった。」(伊藤整 1956Bp272)

◆10月18日 高女で映画館(公園館)を貸切ってアメリカのアクション映画「ダグラスの海賊」(1926年製作、監督アルバート・パーカー、主演ダグラス・フェアバンクス)を全校生徒で鑑賞(北海道庁立小樽高等女学校校友会 1927p35)。

◆12月 伊藤整、第一詩集『雪明りの路』を椎の木社から出版。詩集をちかと根上律の2人に署名入りで献本した。

**【1927年】**（昭和2・16歳）

◆3月 庁立小樽高女卒業。担任は北村隆三九。学年の寄書には「思ひ出しませう かはさき」と記した。川崎昇によると「ちかの卒業式は三月二十四日で、その日は小樽も雪でした。」（小松 1983）

◆4月 英語教員免許取得のため、同校補習科師範部に根上律とともに進学。担任は本間重。同年の高女新入生には、のちに宝塚歌劇団に入団する袴田トミ（芸名園井恵子）と瀧口修造の姪島喜久恵、スキーヤー・画家の加藤（旧姓末武）清江がいた。袴田は翌年1学期末に退校、宝塚音楽学校に1929年に入學する。喜久恵は上京後、成城で洋裁研究所を営む。

◆この頃 いつも根上律と登下校し、小樽市中学校教諭となっていた伊藤整を駅や汽車で見かけると、無邪気な態度で兄に甘えるように話しかけていた。この頃は洋装（セーラー服）で通学していたと思われる。

「川崎昇の妹の愛子は、その年十七歳で女学校の四年生になっていた。彼女は面長で目が細く、眼鏡をかけ、いつまでも少女のように胸が平べったく、制服に黒い木綿のストッキングをつけて、少し前屈みになって歩いた。（略）私もまたこの女学生を自分の妹のように扱った。まだ青春はこの二人の少女を訪れていないように見えた。」（伊藤 1956Bp338）

※実際にはこの年4年生ではなく、補習科1年。高女では1927年度新入生より制服をセーラー服に統一した。それ以前は式服は袴であったが、通学服は和洋混在。

△5月 伊藤整、新潟の文学少女で看護師高山タミとの間に文通を始める（曾根 1977p477～、川西 2011）。

◆6月10～22日 補習科生、東京・京都関西方面へ修学旅行（北海道庁立小樽高等女学校校友会1931）。ちかが参加したかは未確認。

【1928年】（昭和3・17歳）

△1月 伊藤整、詩「海の捨児」を『信天翁』1号に発表。

「私は浪の音を守唄にして眠る。/騒がしく 絶間なく/繰り返して語る  
灰色の年老いた浪/私は涙も潤れた清壮なその物語りを/つぎつぎに聞  
かされてみて眠つてしまふ。//私は白く崩れる浪の穂を越えて/漂つて  
ゐる捨児だ。/私の眺める空には/赤い夕映雲が流れてゆき/そのあとへ  
星くづが一面に撒きちらされる。/ああ この美しい空の下で/海は私を  
揺り上げ 揺り下げて/休むときもない。//何時私は故郷の村を棄てた  
のだらう。/あの斜面の草むらに残る宵宮の思ひ出にさよならをしたの  
だらう。/ああ 私は泣いてゐるな。/ではまたあの村へ帰りたといふ  
のか。/莫迦な。/もうどうしたつて帰りやうのない/遠いとほい海の上  
へ来てゐるのに。//でも今に私は忘れるだらう。/どんな優しい人々が村  
に居たかも。/昔のこひびとは見知らぬ誰かの妻になり/祭の宵には 私  
の思ひ出を/微笑に光る涙にまぎらせても/私は浪の上を漂つてゐるう  
ちに/その村が本当にあつたか どうかさへ不確かになり/何一つ思い  
出せなくなるだらう。//浪の守唄にうつらうつらと漂つた果て/私はい  
つか異国の若い母親に拾ひ上げられるだらう。/そして何一つ知らない  
素直な少年に育ち/なぜ祭の笛や燈籠のやうなものが/心の奥にうかび  
出ることか/どうしても解らずに暮すだらう。」（伊藤整「海の捨児」1928  
年1月）

△2月24日 函館の近く、野田生に住んでいた小川貞子、『小樽新聞』に掲載されていた田中兼通「詩集『雪明りの路』の著者」に引用されていた整の

詩「馬」を読み、整と文通を始めた。田中はちかの従兄川崎尚の筆名。

「馬よ いくら首を振らうとも／鈍重な車は離れないのだ。／馬よ さうして俯向いてゐても／もう考へる事にも飽いただらう。／今朝も泥道は長々と続いて／せなかのこはい毛はさか立ち／馬具は古び 馬車追は貧しい。／もう諦めたことも忘れた頃だが／この泥道をたどる時は／ずっと昔の悲しみが少しは心を刺すらしい。／でも峠を登りつめて／青い朝風が谷から吹き上げると、／おまへは昔の／みやびた足なみを思ひ出してか／坂を下るにも何かたのしさうではないか。」(伊藤整「馬」1924年4月)

◆3月 庁立小樽高女補習科修了。学業は数学・音楽を除き極めて優秀。

「性質行状」「真面目ニテ熱心。事物ノ真相ヲ究明セズンバ止マザルノ態度持チ人生問題等ニツイテモ真面目ニ考ヘ一物ヲ忽諸ニセズ。思想豊富ニシテ加之偏セズ。」(『左川ちか全詩集』「年譜」)

△4月10日頃 伊藤整、上京。京橋区月島西仲通3-6佐藤方に当初下宿。川崎昇と同居。塩谷の同郷で『青空』に短歌を寄稿した前田徳太郎も同居。前田はのちに小林千代子が師事する声楽家三浦環のマネージャーを務める。当時川崎尚も日大予科経済科学生として上京していた(曾根1977p429)。5月下旬から整は父昌整の病状悪化に伴い帰郷。

◆7月13日 伊藤整、父を喪う。葬儀が終わると余市にちかを訪ねる(山森1989p34)。ちかは上京の相談を持ち掛けたと思われる。9月に整は再上京。

◆8月 親族を数カ月説得し、上京。東京府豊多摩郡中野町2753(現中野区

中央4丁目20・23番地付近)の川崎昇宅に同居。

◆9月 伊藤整、交際していた小川貞子への書簡でちかに触れる。「意地になんかなつてはいけません。川崎の妹なんか見てみると、どんなに意地はいけないものかよくわかります。」(伊藤礼 1987p148)

◆この頃 兄の紹介で新橋の貯金局に非常勤で勤務する。昇と伊藤整らを通じ、詩人・作家との交流が広がる。とくに雑誌『椎の木』の百田宗治夫妻宅(牛込区若松町40番地、1929年からは東京市外中野桃園3342、1933年2月からは中野区川添町46の作間氏邸内)には親しく出入りし、娘のように可愛がられた。習っていた剣舞を披露したり、男のような格好をして人を驚かせた(曾根1977)。上京したばかりのちかはまだ眼鏡をかけておらず、中野の昇宅に阪本越郎が訪ねても奥に隠れるような少女であった(阪本越郎1936)。

※『若い詩人の肖像』では女学校上級生のとき眼鏡をつけていたとの記述あり。1927年の項参照。

【1929年】(昭和4・18歳) 散文1篇、翻訳散文7篇発表

◆1月頃 伊藤整、小川貞子への書簡で川崎昇からちかを女性としてどう思うか、交際・結婚云々をもちかけられ困惑したと記す(伊藤礼 1987p148、同2007～08)。昇に思うところがあったと思われる。

「川崎は何かのきっかけに、妹のことを、僕へ話したりしたので少し困ったことがある。川崎の妹は十三位のころから知つてゐるので、どうしても自分の妹であるとしか考へ直せない。そんなこと改めて言ふわけにも行かないし、貞様のこと、彼に一度言つとかなければいけないと思つ

てゐる。」(小川貞子宛伊藤整書簡)

◆4月 前月に川崎昇・伊藤整・河原直一郎が創刊した『文芸レビュー』に筆名「左川千賀」で翻訳を発表開始。以後、翻訳をみてもらうため伊藤整の松ノ木の田園アパートをしばしば訪ねる。左川の筆名の由来は共産党本部の建物を省線の中で見たときだという(小松 1983)。

※当時共産党に本部たる建築物はなく疑問が残る。ヨーロッパへ行く夢がみられるよう眠りにつく少女時代(散文「童話風な」1935年3月)を経て、数年後にシルビア・ビーチのシェイクスピア・アンド・カンパニーやミュチュアリテの文化擁護国際作家会議などのセーヌ左岸文化に関心を持つようになるちかが、自由で前衛的な多重の意味を有した“左”を筆名に用いたものか(島田龍 2018Ap105)。

(関連) 川村欽吾宛書簡 1934年8月、散文「明るい夢と江間章子さん」1935年8月、内田忠「左川ちかのこと」1937年4月

◇4月 初の翻訳「髪黒い男の話」(フランク・モルナール小説)(『文芸レビュー』1-2、1929年4月1日発行)。

△この年前後 4人組の友人根上律、高女補習科修了後勤務していた旭川の小学校を1年ばかりで退職し上京。小石川の川端画塾に通学し洋画を修める。後を追うように両親の経営する余市桜小路の料理屋で働いていた小林次子が洋裁を志し上京、洋裁学校に通う。同級生野沢郁や魚谷スエも上京。律の弟で立教大学水泳部に入った根上博など多くの若者が上京しており、川崎昇が新居で彼らの面倒をみたという。奥村りゑだけは札幌に出て北大事務員として働き、留学していた中国人殷氏とのちに結婚、雲南省の昆明へ渡っていく。段永嘉と改名、戦時中も帰国することはなかったが、晩年は南池袋で過ごした(小松 1972Ap67、曾根 1977p504、山森 1989p29・40)。



◆5月 伊藤整、詩「言葉」「雲雀」（第2次『椎の木』2—6、1929年5月1日）で、アパートでのちかとの会話を思わせる内容を歌う。

「1／彼女は私の中に住んでゐる言葉を皆引ずり出して悪戯したが。私が二つ三つ取り出して預けると、彼女はそれを転がしたり歩かせたり這はせたりして私の顔を見ながら笑ふのである。それが私自身でもあるかの様に。彼女はそれに厭きると、何かもつと変つたのをと強請<sup>せが</sup>む。新らしいのをやると彼女は言ふ。「これ貴方に似て居ないわ」。玩具が足りなくなると彼女は言ふ。「あなたは一寸も妾にかまつてくれないのね。妾つまんない。帰つちあふ」。彼女は常にそれらの玩具を掌に乗せて、ひつくり返し、覗き、微笑み、愛撫し、暫くすると電車へ乗るに邪魔になると言つて敷石へ抛り出すのである。（2は略）」（伊藤整「言葉」1929年5月）

「僕が男であるといふ事だけで、彼女は僕を馬鹿にして居るのである。夜遅く僕の室へやつて来て、今度新らしく出来た男の友達へ手紙を書くから口述してくれと言ふ。だから僕は「あなたは妾の第二番目に大切な男のお友達でございます」と書かせると、次の日、僕の所へその手紙を送つてよこす、といふ様なことばかりするのである。／／雪の国に居る僕の恋人から来た手紙を見付けて、彼女は僕を幸福だと言ふのである。／彼女 その人、妾より美しくつて？／僕 少しばかり。／彼女 その人、ポップ？ ボイッシュ？／僕 どちらでもない。／彼女 その人、太つてて？／僕 いゝや。／彼女 その人、お好き？／僕 君よりは。／彼女 よくつてよ。（彼女は立上る）。妾もう来ないから。／（略）彼女は指へ棘をさす。色んな人にそれを抜くことを試みさせて喜ぶのである。鼻眼鏡の父、痩せた姉、小学生の徒弟、運転手、高等師範学校特待生の書生、僕、それから門のブルドッグにも見せて話

す。「とても、ちくちく痛むつたらないの」。そして彼女はそれを自分で吸ふのである。上目で皆を見まはしながら。「誰か吸つて見たくない」(伊藤整「雲雀」1929年5月)

◇5月 散文「モスコオ藝術座小話」(『文芸レビュー』1-3、1929年5月1日発行)

◆5月頃 文芸レビュー社に編集アシスタント(主に広告・会計担当)として加わる。変名を「左川麟駛朗」とする(6月号・7月号「編集後記」)。文芸レビュー社は、当初は中野の川崎昇宅が発行所。数度移動して1930年5月から銀座西に移転した。

◇6月 翻訳「イソップなほし書き(1) 蟻と蟋蟀」(オルダス・ハクスリー小説)(『文芸レビュー』1-4、1929年6月1日)。ハクスリーの最初の邦訳か。

◇7月 翻訳「イソップなほし書き(2) 蛙と王様」(『文芸レビュー』1-5、1929年7月1日)

◇8月 翻訳「イソップなほし書き(3) 鴉と狐」(『文芸レビュー』1-6、1929年8月1日)

△9月 川崎昇が以前の下宿先の娘である小学校教員の佐藤クラと結婚。百田宗治家の2階で式を挙げる(曾根1977p427)。この恋愛については伊藤整の小説「花ひらく」(1953年)冒頭に用いられた。

◆この頃 百田宗治夫妻よりちかと萩原朔太郎との縁談を打診されるが、昇

は断わった（『左川ちか全詩集』「年譜」）。

△9月 伊藤整、東京市外和田堀松ノ木11の田園アパートから、小川貞子を迎えるための準備として筋向い新築の福定アパートに転居した（伊藤礼1987p149）。

◆9月 兄嫁クラと不和だったちかは、この頃から翻訳や英語指導を受けていた整の部屋にしばしば泊まり込むようになる。整がいないときは管理人女性稲葉定の部屋で話をしながら整の帰りを待っていた（曾根1977p498～513）。伊藤整自身、貞子への手紙にちかとのことを説明している。この頃、整は複数女性と多情な時期を過していた。秋頃には新潟の高山タミに会い、身体を求め拒絶され、以後交際を断った。のち高山は東京で林美美子に師事（曾根1977p480、川西2011p59）。

「兄は可哀そうなのよ。嫂が学校の先生なんだけれど……兄はロマンチストでしょ……嫂には、兄を理解できないと思うわ……居候させてもらってる私がこんなことを言うなんて、いけないことよね……」（江間1985p41）

「川崎の妹が嫂と面白くなくなつて、二日ほどぼくのところに来てみました、昨日嫂が迎に来て帰つてゆきました」（1929年9月15日付小川貞子宛伊藤整書簡、伊藤礼1987p149）

※整の息子礼は次のように推測している。「整と愛の接近は、整が貞子のことを川崎に話し、貞子を迎えるために転居したころにはじまった。（略）川崎の妻ははっきりものを言うひとだった。整や川崎と同郷の青年時代の友人には、それをおそれて川崎に会うことも連絡をとることもできないもの

もいた。愛が嫂との不和のために、整のアパートにころがりこんできたのはこの一回だけでなかったが、さらに進んだ関係となったかもしれないのはその直後だったように見える。」(伊藤礼 1987p149 ~)

◆秋冬頃又は翌年春夏頃 阿佐ヶ谷にある新しい喫茶店(兄昇の妻クラの友人女性が始めた)に、昇宅に下宿していた友人根上律が働いており、伊藤整はちかもしくは昇と会いに行った。このとき又は翌年に、同店で整は小林多喜二・大月源二と文学論を交わした(伊藤整「文学的青春伝」1951年3月)。  
※「文学的青春伝」では「この次の年」(1929年)とあるが、多喜二の上京は1930年3月で1年ずれている。店内でかかっていた「酒は涙か溜息か」は1931年9月。「そのあとで、私はジョイスの翻訳を発表し」(1930年7月)と時間軸が混乱している。ちかと喫茶店に行ったのが1929年9月(昇の結婚)以後で、多喜二と会ったのはそれと別件の1930年春夏頃か、または2つの出来事自体が1930年春夏頃のことと推測される。

◇11月 翻訳「蠅のスープ」(フランク・モルナール小説)(『文芸レビュー』1-8、1929年11月1日)

◇12月 翻訳「二つの話」(モルナール小説)(『文芸レビュー』1-9、1929年12月1日)

◆12月 川崎昇夫妻とともに中野から世田谷の新築に転居(東京府豊多摩郡世田谷町2994番地、のちの東京市世田谷区世田谷5-2994、現世田谷区桜丘2丁目24番地付近)。最寄りの小田急の祖師谷大蔵駅・千歳船橋駅は1927年に開業したばかりであった。家ではレオという犬を飼っていた(小松1972Ap69)。

【1930年】（昭和5・19歳）詩5篇、翻訳詩篇1篇、翻訳散文1篇発表

◇1月 翻訳「闘争」（シャーウッド・アンダーソン小説）（『文芸レビュー』2-1、1930年1月1日）この作品までは左川千賀名義。

△1月 伊藤整、貞子へ書簡。前年11月から翌年1月初旬までの40日間、整と貞子の間で書簡が途絶える。再開前後のやり取りから、整の女性問題を背景に音信が絶え、さらに貞子の両親との問題が原因で貞子の上京の決断が伸びていたと推測される。4月下旬にも3カ月近く、整は貞子へ手紙を出さなかった（伊藤礼1987p146～187）。

「明日は貞ちやんと話の出来る僕になると考へては、汚い自分を忘れるために僕は眠るのです。そのことは逢つてでなければとても貞ちさんには詫びることさへ出来ないのです。（略）貞ちさん、貞ちさんしつかり僕をとり囲んでみてくれないと、僕は何といふ荒涼さでせう。（略）貞ちさんは僕が信頼出来ないのでせう。これは秋にひとりで、悲しく、来なくなつた貞ちさんに就いて考へたことです。（後略）」（1930年1月4日小川貞子宛伊藤整書簡。伊藤礼1987p150～）

◆春 伊藤整の福定アパートでちかの目撃が相次ぐ。頼まれていた洋服の仮縫いを持参した友人小林次子は、川崎昇とともにアパートを訪ね、電気が消えた部屋から出て来たちかと会った。同じ頃、野長瀬正夫は、ハタキを持ってかがいしく整の部屋を掃除しているちかを見かけた（曾根1977p514、小松1972Ap72、山森三平1989p38）。

この頃、従兄の川崎尚、整のアパートを訪ね、部屋にいる女の気配を察した。のちに貞子に違いないと考えた尚は、貞子本人に問い質すも言下に否定された。貞子はそれが誰であるかすぐにわかったが、尚には話さなかったという。

尚はのちに「その部屋に誰がいたか。北海道から彼を追って押しかけて来た少女がいたとは後日の噂話であった。それが詩集の批評文記事で文通を始め、恋の炎を燃やしていた少女であったのかどうか—」と、ちかとも貞子ともとれるよう曖昧に記した（田居 1976、曾根 1977p514）。

△4月26日 川崎昇の企画で「文芸レビュー文芸講演会」が読売新聞社講堂で開催。伊藤整は受付。百田宗治、神原泰、佐藤春夫、阿部知二、新井格、北川冬彦、瀬沼茂樹、舟橋聖一が講演。佐藤・阿部・新居・北川は築地警察から中止命令（瀬沼 1971p335、伊藤礼 2007～08）。

◆初夏 銀座の井上ビル3階3畳間の文芸レビュー事務所（京橋区銀座西4-5、銀座和光裏のプラタナス通の日本昼夜銀行の横にあった酒屋の上階）で昇や整らの手伝いに詰めていたちかは、昇に紹介され2階に住む北園克衛と出会った。ちかの詩を読んだ北園は、その詩才に驚き詩誌『白紙』のメンバーに加える。時々2階に顔を出し北園に詩のアドバイスを受けるようになる（山森 1989p35）。その頃昇は貯金局を退職し東京市役所に勤務。

「銀座四丁目裏にあつた文芸レビュー社の三畳の部屋であつた。その時私は二三の友とは三畳の部屋について広すぎる狭すぎる部屋全体がベッドになつてゐる間の襖をあけて隣の部屋から風を入れれば大いに楽だと言つてゐた」（衣巻省三「森本忠」『文芸汎論』6-3、1936年3月）

「安っぽい木造三階建ての家で、一階は酒屋であり、二、三階が貸間になっている。店先の片隅の狭い階段をあがると、そこが二階で、超現実主義の詩人北園克衛が住んでいた。妙に薄暗い現実離れの部屋で、向いの部屋に芸者と旦那らしい人がいた。三階は屋根裏部屋で、大きな文芸レビュー社の看板をかかげてあつた。四畳半位の部屋は、同人がいちど

に入ると、たちまちいっぱいになった。なんとなく落ちぶれた、装飾のない、「文芸レビュー」の返品を片隅につんだ畳敷の部屋であるが、私たちには金殿玉樓にみえ、「屋根裏の哲人」を気どった。(略)川崎や伊藤から招集がかかると、この部屋に顔をあわせて、たびたび同人会をひらいた。同人会は、一階が酒屋だから、いつもビールを酌むならいになっていた。酒席で、屈託なく、賑かなのは衣巻である。(略)川崎は黒い顔を赤くして、「アノね」と遠大な計画をくりひろげた。(略)みなこのように乱れた様子を、伊藤は静かに観察していた。」(瀬沼茂樹 1971p337～)

「その頃、私はよく、しばしば銀座の街を北園克衛と歩いた。そしておお、阪本越郎とか瀬沼茂樹とか春山行夫とか川崎昇とか北川冬彦とか辻野久憲とか瀧口修造とか衣巻省三とか金田禾白とか一戸務とか乾直恵とか城左門とかその他多数の、実に多数の二五六歳の詩人小説家の群がそこにいた。私や衣巻や川崎の雑誌の事務所が、北園の室の上、その酒屋の三階にあった。そこで私たちは、十銭のソバを食べたり、三十五銭のビールを飲んだりして、昼飯晩飯を抜きにして暮らした。」(伊藤整「詩の運命」1947)

「僕はそこで一人の若い詩を書くといふ少女に紹介された。そのいかにもしなやかな体つきの少女が左川ちかであつたのである。当時彼女はまだ自分の書く詩が、他の詩人達を書く詩とあまりにかけ離れてゐるので、戸迷ひしてゐるといふ状態だつた。凡庸でない詩人が最初に経験するこの不当な不安といふのが、いかに無慈悲なものであるかを、平凡な詩人達は想像することができない。」(北園克衛 1951)

△5月 伊藤整、銀座のバー「スリー・シスター」のマダム、ヨネ子と関係

を持つ。店には衣巻省三、副田清人、萩原朔太郎、青柳瑞穂らが入り出ていた。関係は10年以上続き、1942年5月に川崎昇が別れ話の仲裁に立った。伊藤整『太平洋戦争日記』1943年5月12日、1944年1月29日など。ヨネ子は戦後石川淳と同棲した（曾根1977p516～、伊藤礼2007～08、川西2011）。

◆5～6月 庁立小樽高女の在京同窓会である小樽会が開催。在京の24回生（ちかは19回生）まで誘いかけがあった。翌年に桜陽会東京支部と改称か。以後毎年集いが開催。

年月は不明だが、ちかも同窓会の事務手伝いをしていた。東京支部の顧問は河崎なつ（1889～1966）。河崎は同校元教員（1912～16）で、東京の文化学院創立者の一人で学院の国語教師であった。戦後に参議院議員となる。

河崎は小樽時代も独自の自由作文教育を実践しており、教え子たちが河崎を囲む会が同窓会に発展した。女性解放運動家でもあった河崎は、主な会場であった文化学院で女性の普選運動を始めとする時事問題や教育問題を話題にしており、河崎を慕う小樽高女卒業生にも女性運動に共鳴する気運が高まっていった（林光1974p36）。

直接の教え子に限らず、高女卒業生たちに目をかけていた河崎に、ちかは1935年に家庭教師先の教え子の進路を相談するなど交流を持っていた（川崎昇1983）。ちかが編集長の三浦逸雄と交流のあった『セルパン』1935年5月号に、河崎は時評「顧みられぬ母と子！」を執筆。翌6月号にちかは詩「海の花嫁」を寄稿している。自由主義教育を続けた文化学院には川端康成らが教学に関わり伊藤整も講演している（伊藤整『太平洋戦争日記』1943年8月31日）。1943年8月に閉鎖が命じられ、戦後復興するも2018年3月に閉校した。

◇8月 初めての詩を2篇発表する。「昆虫」を川崎昇発行の『ヴァリエテ』



1号（1930年8月1日）に発表。

「昆虫が電流のやうな速度で繁殖した。／地殻の腫物をなめつくした。／  
／美しい衣裳を裏返へして、都会の夜は女のやうに眠つた。／／私はい  
ま痣を乾す。／鱗のやうな皮膚は金属のやうに冷たいのである。／／顔  
半面を塗りつぶしたこの秘密をたれもしつてはゐないのだ。／／夜は、盗  
まれた表情を自由に廻転さす痣のある女を有頂天にする。」（詩「昆虫」  
1930年8月、全文）

◇8月 もう1つの初めての詩「青い馬」を岩本修蔵・北園克衛の『白紙』  
10号（1930年8月1日）に発表。

「馬は山をかけ下りて発狂した。その日から彼女は青い食物をたべる。夏  
は女達の日や袖を青く染めると街の広場で楽しく廻転する。／テラスの  
お客達はあんなにシガレットを吸ふのでブリキのやうな空は女の頭の  
落書きがいくつも残る。悲しい記憶は手巾のやうに捨てようと思ふ。恋  
や悔恨やエナメル靴を忘れることが出来たら！／ 私は二階から飛  
び下りないで済んだのだ。／ 海が天にあがる。」（詩「青い馬」1930年  
8月、全文）

※左川ちかの詩には最後の詩「季節」まで時折「馬」が登場する。「林檎畑  
や、その白い花、北海道の海、人々に使はれてゐる馬たちは、左川さんの  
育つた風景であつたらしい。ときどき、人々が言ひ合ふ、「左川ちかは馬  
を好きだ」と。」（江間 1936D）

◆9月 伊藤整、北海道から小川貞子を伴い中野町新町 3838（現中野区本町  
6丁目付近）に転居、新婚生活に入る。貞子の存在と交際はちかはもちろん

のこと、川崎昇にさえ秘密にしていた。のちに友人江間章子に整の名を伏せて次のように語った。

「私、自分が失恋したときのことを、思い出していたのよ。……郷里へ帰っていた彼が、結婚して、奥さんをつれて東京へ戻ってきたと知ったとき、私は、全身冷汗でびしょりになってしまったの。そして、坐っていた二階の端から、階段を階下まで転がりおちてしまったのよ。」(江間 1985p90～)

◆9月 伊藤整、新婚生活開始の数日後、ちかは貞子と初めて出会う。貞子はその日以来、整とちかとのことで悩み続けた。整は昔からのつきあいだと取り合わなかった。

「川崎愛が、整に見てもらいたい原稿があるといって、新町の家に来て来た。整は愛の原稿を時間をかけていねいに見てやり、いろいろ自分の考えを述べたりした。二人の話しぶりはいかにも親しそうで、愛は、整に甘えているような口のきき方をした。時々、整の側に寄って整の肩にぶらさがったり、整の膝に手をのせたりした。すぐ隣の部屋でそれを見ていた貞子は、びっくりして言葉も出なかった。いつまで経っても愛が帰らないので、狭い家にただじっと坐って二人の様子を見ているのが堪えられなくなり、ぶらっと外に出た。少しして戻っても、まだ愛はいた。貞子は再び外に出て歩きまわった。近くに枳殻からたちの垣根があって、夕陽がそこに透けてくるのを眺めていると、急に悲しくなった。嫁きたばかりなのに、と思うと、涙がこみあげて、抑えることができなかった。」(曾根 1977p518)

◆9～10月頃 勤め帰りに小さい花束を抱え小林次子のもとを訪ね、「伊藤

さんのところに寄って来たのよ。内緒だけれど、今日も、さつま芋ごちそうになっちゃったのよ」と、何かを思い出すようにクスクスと笑った（小松 1972Ap73）。

◇10月 「秋の写真」（『白紙』11、1930年10月1日）

◇10月 「朝の麵包」（『文芸レビュー』2-9、1930年10月1日）

◇10月 翻訳「SLEEPING TOGETHER」（ハリー・クロスビー詩）（『レスプリ・ヌウボオ』3、紀伊国屋書店、1930年10月5日）

「左川ちかはハリー・クロスビーの詩を訳した。それからその結果として百貨店で赤いスリッパを買って、銀座を散歩した。」（春山行夫 1936）

◇12月 「墜ちる海」（『レスプリ・ヌウボオ』4、紀伊国屋書店、1930年12月1日）

◇12月 「青い馬」（『越佐詩歌集』、越佐詩人協会編、1930年12月30日）再掲。初出 193008。

◆この年 眼鏡を再びつけ始める。訳していた『室楽』の著者ジョイスの丸眼鏡を意識したという（小松 1972Ap68）。丸眼鏡は当時の流行で伊藤整たちも愛用していた。

「黒縁の強い近眼鏡をかけてみて、殊にそのブリツヂのところが上方についてゐるやつで、集会などではよく目立つた。ことに前髪を揃へて、面長の顔にその眼鏡がよく似合つて、左川ちかといふ存在の仕方をして

みた。」(阪本越郎 1936)

◆この年か 世田谷の自宅に乾直恵が時折訪ね、ベランダ風の庭に面した縁側にテーブルを出し親しく話すようになる。

「洋服をつけるとその詩のやうに大変大人らしく理智的に見える方でしたが、家に居て和服をつけるとその反対に大そう子供っぽく見え、興がのると口に一杯泡をためて話したりする、こだはりのない方でした。」  
(乾直恵 1936)

【1931年】(昭和6・20歳)『室楽』連載に加え、詩11篇、翻訳詩1編、翻訳散文55篇発表

◆1月 ジェイムズ・ジョイス『室楽』の翻訳を『詩と詩論』などに発表開始。兄昇に買ってもらった厚い英和辞典を引き、伊藤整の監修を受けながら約1年かけて翻訳した。詩友阿部保の証言によると、散文詩調に訳す方法は百田宗治の提案という(小松 1972Ap86)。

◇1月 翻訳「室楽1～7」(ジェイムズ・ジョイス詩)(『詩と詩論』10、1931年1月1日)

◇1月 翻訳「芸術と精神分析」(アーネスト・ジョーンズ評論)(『新文学研究』1、1931年1月25日) 同誌は金星堂の編集部員でもあった伊藤整が編集を推進した季刊雑誌。

◇1月 翻訳「新レパトリー劇場の設計解説」(ノーマン・ベル・ゲッツ解説)(『新文学研究』1、1931年1月25日)

◆春山行夫ら詩人たちとの交流が深まり、『詩と詩論』など複数の雑誌に詩や訳詩を発表するようになる。

◇2月 「出発」(『今日の詩』3、1931年2月1日)

詩人山中富美子、「出発」を読んで大きな感銘を受ける。

「ガラスの翼にのせた美しい興奮をもたらして突然目の前におどり出たこの夜明の光は、いかに自由な新鮮な色彩をしたたらして幼稚なその当時の私の心を刺戟したことでありませう。」(山中1936)

◇3月 翻訳「室楽8～15」(『詩と詩論』11、1931年3月18日)

◆春頃より腸間粘膜炎に罹患。約1年間、薬を服用する。

◇4月 「黒い空気」(『今日の詩』5、1931年4月1日)

◇4月 翻訳「憑かれた家」(ヴァージニア・ウルフ小説)(『今日の詩』5、1931年4月1日)

ウルフの訳は編集部(百田宗治か)から依頼されたもの(「編集後記」)。

◇4月 「錆びたナイフ」(『白紙』13、1931年4月10日)

◇4月 翻訳「男・手風琴・雪の破片」(ハーバート・リード小説)(『新形式』1、1931年4月10日)

◇4月 翻訳「いかにそれは現代人を撃つか？(1)」(ヴァージニア・ウルフ評論)(『新文学研究』2、1931年4月15日)

- ◇5月 翻訳「室楽 18～20」(『今日の詩』6、1931年5月1日)
- ◇5月 「雪が降る」(『新形式』2、1931年5月5日)
- ◇6月 「緑の焰」(『新形式』3、1931年6月5日)
- ◇6月 詩6篇『詩と詩論』に再掲。「出発」再掲・初出193102、「黒い空気」再掲・初出193104、「錆びたナイフ」再掲・初出193104、「朝のパン」再掲・初出原題「朝の麵麩」193010、「雪が降つてゐる」再掲・初出原題「雪が降る」193105、「青い馬」再掲・初出193008。いずれも『詩と詩論』12、1931年6月16日
- ◆7月 伊藤整、ちかをモデルにしたと思われる小説「海の肖像」を発表(『新作家』3-5、1931年7月1日／『文学クオタライ』1で改稿、1932年2月10日／『生物祭』金星堂、1932年10月20日)。
- ◇7月 「朝」(『白紙』14号、1931年7月5日)
- ◇7月 「緑色の透視」(『レスプリ・ヌウボオ』2-2、紀伊国屋書店、1931年7月5日)
- ◇7月 翻訳「詩の一群」(チャールズ・レズニコフ詩)(『白紙』14、1931年7月5日)
- ◇7月 翻訳「いかにそれは現代人を撃つか？(2)」(ヴァージニア・ウルフ評論)(『新文学研究』3、1931年7月20日)

◇8月 翻訳「室楽 21～23」(『今日の詩』9、1931年8月1日)

△8月20日 伊藤整の長男、伊藤滋誕生。根上シゲルの名を思わせる。

◇9月 「死の髯」(『今日の詩』10、1931年9月1日)

「料理人が青空を握る。四本の指跡がついて、／——次第に鶏が血をながす。ここでも太陽はつぶれてゐる。／たづねてくる青服の空の看守。／日光が駆脚でゆくのを聞く。／彼らは生命よりながい夢を牢獄の中で守つてゐる。／刺繍の裏のやうな外の世界に触れるために一匹の蛾となつて窓に突きあたる。／死の長い巻鬚が一日だけしめつけるのをやめるならば私たちは奇蹟の上で跳びあがる。／／死は私の殻を脱ぐ。」(詩「死の髯」1931年9月、全文)

◇9月 「断頭機」(『今日の文学』1-9、1931年9月1日)

△9月18日 柳条湖事件(満州事変始まる)

◇10月 「ガラスの翼」(『今日の文学』1-9、1931年10月1日)

◇10月 翻訳「室楽 25～30」(『今日の詩』11、1931年10月1日)

◇10月 翻訳「いかにそれは現代人を撃つか？(3)」(ヴァージニア・ウルフ評論)(『新文学研究』4、1931年10月13日)

◇11月 「季節のモノクル」(『白紙』15、1931年11月1日)

◆12月15日 伊藤整・永松定・辻野久憲訳『ユリシイズ』（第一書房）前篇出版記念会が新宿の明治製菓楼上で開催。川端康成、横光利一、堀口大学、川崎昇ら80余名出席。ちかも出席か。

◇12月 詩5編『詩と詩論』再掲。「青い球体」再掲・初出原題「朝」193107、「緑の焰」再掲・初出193106、「断片」再掲・初出原題「断頭機」193109、「ガラスの翼」再掲・初出193110、「季節のモノクル」再掲・初出193111。いずれも『詩と詩論』14、1931年12月17日

◆1931年後半頃か 新宿の白十字で詩と詩論の会。詩人麻生正の紹介で静岡県富士市の詩人加藤一と出会う。ちかは西脇順三郎の英文詩集『SPECTRUM』を持参していた。加藤は詩人荘生春樹のことを話題にし、その帰途紀伊国屋で一緒になり駅まで話して歩いた。

その後ちかは麻生・加藤が扱った『海盤車』に詩「風」（1932年6月）を始め10篇ほどを寄稿する（加藤一1936）。

#### <1931年、ちかに関する主な文献>

北園克衛「二人の若い女詩人」（『今日の詩』5、1931年4月）

百田宗治「左川ちか・山中富美子」（『詩と詩論』12、1931年6月）

XYZ「（レントゲン室）左川ちか子氏と澤木隆子氏」（『今日の詩』10、1931年9月）

**【1932年】**（昭和7・21歳）詩22篇、翻訳散文1篇発表

◆1月 創刊された『新文芸時代』（金星堂）の同人27名に名を連ねる。同誌は、旧『文芸レビュー』（伊藤整、川崎昇、河原直一郎、田居尚、衣巻省三、瀬沼茂樹、乾直恵、阪本越郎、北園克衛ら）と旧『風車』（上林暁、森



本忠、永松定ら）が合流した『新作家』（1931年4月～10月）の後継誌であった。ただ『新文芸時代』でのちかの活動は確認できない。

◇1月 翻訳「室楽 32～34」（『椎の木』1-1、1932年1月1日）

◇1月 「循環路」（『椎の木』1-1、1932年1月1日）

◆1月16日 「FORGET ME NOT」と題された「手形帖」に自らの手形を写し取る。手形帖には他にも北園の手形などを取っている（『左川ちか全詩集新版』写真）。2月の春山宛書簡の「お友達からすけつちぶつくを貰った」とは、この手形帖を指すか。

◇2月 翻訳「室楽 35～36」（『椎の木』1-2、1932年2月1日）

◇2月 合作詩「冬の詩」（竹中郁、北園克衛、春山行夫、澤木隆子、杉田千代乃、左川ちか、『若草』8-2、1932年2月1日） 自らの詩で初めて原稿料を得る。

◇2月 「青い道」（『反響』4、1932年2月5日）

◆2月7日 中野の菊屋で開かれた第1回椎の木茶話会に出席。阿部保、乾直恵、丸山薫、阪本越郎、伊藤整、春山行夫、三好達治、三浦逸雄、百田宗治ら出席者32名（椎の木1-3「椎の木の会消息」）。

△2月10日 川崎昇の長男、奎誕生。

△2月10～20日 ムーラン・ルージュ新宿座第5回公演にちかの高女同級

生小林千代子（前年に東洋音楽大学を首席卒業）、ソプラノ歌手として加入し初舞台。演目「嘆きのセレナーデ」「松島音頭」。小林は7月に新宿座を辞め松竹楽劇部に移籍した。ムーランルージュ新宿座は1931年12月31日開館。知識人や学生たちに親しまれた（中野正昭2011）。打和長江のちか追悼詩「黒縁の写真」1936年4月参照。

◆2月14日 春山行夫と書簡のやり取り。初めて原稿料を貰った合作詩「冬の詩」の礼。この頃、スケッチブックを友達から貰い毎日いたづらをしていた（島田2019C）。

「拝啓 お手紙ありがとうございました。生れて始めて原稿料をいただきましたので、うれしくて、どうしていいのかわかりません。四人も五人ものひとに御馳走するつて約束してしまひました。ほんとうに色々ありがとうございます。二、三日うちに御礼にまいりたく存じます。春山さんのお部屋はいつもどつさり花があつていいと思ひます。菜種の花はもうしほれたか知ら。私はお友達からすけつちぶつくと貰ったので毎日いたづらしてをります。こんどおみせ致しませう。さようなら」(1932年2月14日春山行夫宛左川ちか書簡)

◆1932年2月か 詩友内田忠に書簡（年月不明）、内田と同郷の祖父長左衛門に言及。内田は1930年9月に福井県丸岡から上京。12月に百田宗治の『今日の詩』に加入。31年12月に帰郷しており、32年7月『椎の木』に参加する（則武三雄1972）。書簡は1933年の可能性もある。

「……なまけてばかりをります私でございますので、他人の美しい衣装を眺めてゐるやうな少しさびしい気がいたします。文学といふやうなものにしかよりどころがないくせに、むりやりにしがみついてゐるのがた

まらなくなります。なまけてゐる時は自分に釈明して。何てやせがまんばかりしてゐるのだらうとつまらなくなります。此の頃は私、少しくさつてゐるみたいでございます。

先日百田さんそこへ参りましたら、内田さんが福井へ帰られたお話をしていたつしやいましたのですけれど、丁度新聞でそちらの方大雪を報じてましたので無事かしらと少し心配いたしました。吹雪で息が出来なくなるやうな冬の日なんかもう忘れてしまひましたけれど。私の祖父の長左衛門といふ名のひとも福井でございましたので、小さい時に聞かされた越前の話を想ひ出すのでございます。／二月に入つて東京も十センチ程積もつて見事な雪景色でございます。……」(内田忠 1937)

◆3月 従兄の川崎喜代治が組織した北海道青年協会の機関誌『北海青年』3月号の編集に携わる。確認できる『北海青年』が不揃いであるため正確な期間は詳らかでないが、3巻23号(3月号)では東京支局が文芸レビュー事務所(銀座の井上ビル)に置かれ、編集兼発行印刷人に「川崎愛」とある。世田谷町2994の川崎昇方が東京支局となった夏から秋にかけては、文部省社会教育局でもあった阪本越郎が「世界各国の青年団」を連載しており、ちかの人脈によるものと思われる。3巻25号(5月号)以降現存する同誌では喜代治が編集兼発行印刷人を務めており、翌1933年の4巻34号(1月号)では東京支局の名が消えていることから、ちかや昇の関与が減ったと推測される。

◇3月 「記憶の海」(『文学』1、1932年3月18日)。他に詩3篇を『文学』同冊に再掲。「幻の家」改作再掲・初出原題「死の髻」193109、「青い道」再掲・初出193202、「循環路」再掲・初出193201。

◇4月 「冬の肖像」(『椎の木』1-4、1932年4月1日)

◆1932年か 伊藤整と貞子の結婚後、春が過ぎて蜜柑の時期が終わった頃、整の家を訪ねたたちが蜜柑を食べたいと口にする。蜜柑を買って来いと整に命じられた貞子は、暗くなった町を探し歩くが見つけれなかった。がっかりして帰宅すると、「部屋の隅に整と愛が身体を寄せあうように座って、帰ってきた貞子の顔を見た。」(伊藤礼 1987p155～、同 2007～08)

◇5月 「硝子の道」(『関西文芸』、8-5、1932年5月1日) 関西の藤村青一の紹介か(島田 2018B)。

◆5月 北園克衛たちとアルクイユのクラブ結成、会員となる。詩誌『マダムブランシュ』創刊。

「四十数名の大きなグループとなつてからも、目だつた存在であつた。ただ、目だつた存在といつても、それが言ふところの人間的な華やかさといふ意味ではない。病弱であつたし、口かずもすくなかつた。さういふわけで、月一回のティパアティで顔をあはせるほかは、あまり逢ふこともなかつたし、手紙の往復も殆どかぞへる位ひしかなかつた。(略)彼女は生れつき謙譲で静かな性質であつたが、詩の世界では王女のやうに自由に大胆にふるまつていた。美も死も彼女の自由を奪ふこともゆがめることもできなかつた。彼女は自分自身の詩を書くために生れてきたやうなものである。」(北園 1951)

◇5月 「白と黒」(『マダム・ブランシュ (MADAM BLANCHE)』1、1932年5月15日) 同誌の巻頭を飾る。

△5月15日 5・15事件

◆初夏 アルクイユのクラブの会合で江間章子と初めて出会い、生涯の親友となる。ちかは会合にまめに出席。喫茶店でコーヒーと菓子を前に格別議論するでもなく、つつましやかな行儀のよい会合であった。川村欽吾によれば、江間とちかの性格は全く対照的で、何かと明るくにぎやかな雰囲気を作りだす江間に比べ、ちかは常に寡言でわずかに微笑むぐらい、きわめて知的で近づきがたい印象だったという（川村欽吾 1979）。

友人となった江間は、北園のオフィスにちかを訪ねたり珈琲店で会うなど、1週間に数回の頻度で話をしていた。ちかは苺が好物で、文学論よりも母や兄のこと、恋愛、詩人の噂話を江間と交わしていた。クラブの会合では川村欽吾、近藤東たちとも話していた。会合で和服姿の近藤東と会うと「近藤さんは美男子ねえ」と江間にささやくこともあった（江間 1935・1936B・1985p132）。

◆1932年頃 黒い服を好んで身に着けるようになる。緋色の裏のついた黒い天鵝絨の短衣。細い黒い線のある絹のシャツ。黒天鵝絨のスカート。広がりボンのついた踵の高い黒い靴。黄金虫の指環。水晶の眼鏡。黒いベレー帽。服は自分でデザインしたものだった。東京で洋裁を修行していた友人小林次子に自分の服を依頼していた。小林には北園克衛も黒いワイシャツなどを注文していた（山森 1989p38）。

※創作詩に集中する詩人としての充実期に黒い衣裳が重なっている。眼鏡については「樹間をゆくとき」（1935年6月）参照。

「（ちかの衣裳とアクセサリーが：引用者）すべての現実を濾過して彼女の小さな形のよい頭の中に美しい image を置く。それらは彼女の、華奢の限りをつくした身体を寧ろいたいたしいものにして居る。それは美しい人間と言うよりか、人間の精髓をより鋭く感じさせる。それは燃え上る火の紅ではなく、消えることのない焰の青さだ。リラダンやフィオナ・

マクロオドが描く古びた庭園や古城の廻廊にふさわしい彼女の澄んでいるが弱い声。その澄明な弱い声が語る単純な数語が、数多の高い哲学的思念や厳しい知見に一致する。」(北園 1932)

「その当時、左川さんの用ひる色は黒ばかりであつた。それが、黒い服を着るといふよりも、影を衣裳にして身に着けた素的さだつた。」(江間 1935)

「ちかさんは黒いドレスを何時もきてゐた。狭き門の書き出しのやうに、又よく似合つてもゐた。兄貴の趣味も交つてゐるのだとも思ふ。よく妹のドレスに就いて相談もちかけられたことがあつたから。又、こんなドレスをつくつてゐやがるよとか。」(衣巻 1936)

「花園の中をあなたは黒い服をきてあるいた／(略)／あなたたのやさしい眼は／あの日の黒い眼鏡の縁の中へ消えうせた／(後略)」(村野四郎 1936)

「表が黒く裏の火のように紅いマントをきていた彼女の姿が今も思い出される。」(阪本 1961)

「黒のベレーがよく似合った。(略) つつましいがなにか昂然として、自からの孤独の世界が自信に充ちたものごとくであった。膚はやや小麦色、やや大きめの鼻が特徴で、顔だちも整っている方ではない、歯ならばも不揃いであった。そうした自分の容貌をよくのみこんだ上で、強い意志力に支えられた強靱な知性で、むしろ知的に輝き魅力的であった。それが不意に笑顔をつくり、歯を見せた時などの表情は、意外に素朴な親愛感をあたえた。」(川村 1979)

「黒い天鵝絨の服を着て、黄金虫の指環をするようになるのは、昭和九年頃からである。一人でデザインして縫ったものらしい。毛糸あみは好きで、真白いセータを何年もかかって編んでいる。気に入らないと殆ど全部ほどいてしまう」（小松 1972Ap72）。

※小松は「昭和九年」と記すが、詩友たちの回想から 1932 年半ばに遡ることがわかる。

◇5月 翻訳「遅い集り」（ジョン・チャーヴァー小説）（『新文学研究』6、1932年5月17日）

◇6月 「蛋白石」（表題「疋白石」は誤記・「神秘」（『椎の木』1-6、1932年6月1日）

◇6月 「風」（『海盤車』1-3、1932年6月1日）

◇7月 「夢」（『マダム・ブランシュ』2、1932年7月1日）

◇7月 「樹魂」（『反響』17、1932年7月15日）

△7月 藤村青一、詩「淡水と気温—左川ちか女に一」を発表し、ちかに詩を捧げる（『仮説』2、1932年7月15日、島田 2018B）。

「ぼくの顔は冷たいかしら。道理、顔には小川がさらさら流れてゐる。／あの水脈<sup>み</sup>の青さに浮沈する枯葉の……。／魚のやうに後退するぼく。ぼくの鱗は悲しく顫へて。／ぼくの枯葉のあのぼくは放浪の身、河底に全く沈む身。沈むだぼく<sup>ひろ</sup>を拾つておくれ。／（略）／金の勳章。／銀の勳

章。／一ぼくは孰方を擇ばねばならないの。／ぼくのきみはぼくの胸を、  
 ものの見事に射つてゐる。／ぼくの通風。空虚に敷かれた星座が光つて  
 ゐる。／ちか、ちか、光る鱗片の牽制。あのぼくの胸から上<sup>のぼ</sup>つてゆく  
 水泡<sup>みなは</sup>の墓標はただ、それ。／銀のお月様ひとつ。」(藤村青一「淡水と  
 気温」1932年7月、部分)

◇8月 「白く」(『海盤車』1-4、1932年8月10日)

◇8月 ジョイス訳詩集『室楽』を左川ちか訳・伊藤整監修として椎の木社より刊行。8月10日発行。300部限定。雑誌初出を補い『室楽』を日本で初めて完訳した。生前唯一の著書。この後ちかは翻訳を1年ほど中断、詩作に集中する。

「斯のごとき完全な詩人に依つてなされた(室楽)の translation が最早や散文として訳し得べき如何なる部分も texteに残さなかつたことは改めて言ふまでもないことである。」(北園 1932)

◆8月末～10月上旬 4年ぶりに帰郷、数週を過ごす。余市の実家は祭の夜に留守居番の不注意から火災で焼け、母と妹は札幌に移住していた。

◆8月末 北園克衛に葉書を投函。「札幌はあまり静かなので、不安で臆病になりそうです。」(北園 1932)

同じ頃、内田忠にも葉書を投函。「札幌は静かな冷たい街です。あまり清浄な静かな空気が心臓を刺戟しすぎますので人たちは羊毛の襟巻を覆つて居ります。」(内田 1934)

◆9月29日か 札幌から春山行夫へポプラの林を背景とした北海道大学構



内の広い野原の絵葉書を投函（春山 1936、島田 2019C）。

◆ 10月 家庭の事情で東京を去り余市に帰郷していた小林次子の家（大川町の桜小路で両親が料理屋を営む）を訪問。近くの喫茶「青い鳥」で別れの挨拶をした。

「次ちゃんに急にあいにくなって」眼鏡をはずし、細い目が力なく次子を見る。次子は、久しぶりに逢う古い友だちに、一体どんな言葉をかけてよいのかしばらく言葉をなくしていた。ちかはそんな次子に、ほっとしたのか、いくらか口もとに微笑を浮べて人なつっこいその瞳に、涙があふれた。「ちかちゃんは、まだ伊藤さんを忘れることができないているのだ」。(略) 別れの挨拶を交わした。左川ちかは、ふりかえらなかった。」(小松 A1972p72～)

◇ 10月 「The street fair」(『椎の木』1-10、1932年10月1日)

◇ 10月 「緑」・「The Madhouse」(『文芸汎論』2-10、1932年10月1日)  
城左門の企画で左川ちか、山中富美子「海岸線」、一木薔子「夏」との女性の詩特集。

「本号で初めてその量的な意味に於て、一通りは完備した文学雑誌と云ふもの形をなして、読者諸氏にまみえることが出来る様になつた。」(城左門「編集後記」)

「朝のバルコンから 波のやうにおしよせ／そこらぢゆうあふれてしまふ／私は山のみちで溺れさうになり／息がつまつて いく度もまへのめりになるのを支へる／視力のなかの街は夢がまはるやうに開いたり

閉ぢたりする／それらをめぐつて彼らはおそろしい勢で崩れかかる／  
私は人に捨てられた」(詩「緑」1932年10月、全文)

◆10月下旬 伊藤整の第一小説集『生物祭』(1932年10月、金星堂)の出版記念会が新宿の京王百貨店階上で開催。左川ちかも出席。黒天鵝絨服にベレー帽であった(川村1979)。

※同単行本で小説「海の肖像」が大幅改稿。ちかをモデルとしたと思われる「冬子」に、恋愛の妨害者としての側面が強調された(島田2019Bp219～)。

◇11月 「季節のモノクル」(『白紙』15、1931年11月1日)

◇11月 「雲のかたち」(『マダム・ブランシュ』3、1932年11月1日)

◇12月 「眠つてゐる」・「雪の日」(『文芸汎論』2-12、1932年12月1日)

◇12月 「鐘のなる日」(『海盤車』1-6、12月5日)

◇12月 詩5篇を「睡眠期」と改題改作し『文学』に再掲。「睡眠期1」初出原題「眠つてゐる」193212、「睡眠期2」初出原題「神秘」193206、「睡眠期3」初出原題「白と黒」193205、「睡眠期4」初出原題「夢」193207、「睡眠期5」初出原題「The Madhouse」193210。いずれも『文学』4、1932年12月16日。

◇12月 詩4編を『文学』に再掲。「蛋白石」初出193206、「白く」初出193208、「雲のかたち」初出193211、「風」初出193206。いずれも『文学』4、1932年12月16日。

◆1932 年後半頃か 阪本越郎と江間章子、ちかについて話す。

「最近、おちかさんは、川崎君の家にはないらしいなア。どこに住んでいるか、あんた知ってますか」「いいえ」と、私は知らないままに、こたえた。」(江間 1985p108～)

#### < 1932 年、ちかに関する主な文献 >

北園克衛「左川ちかと室楽」(『椎の木』1-10、1932 年 10 月)

春山行夫「雑感」(『椎の木』1-12、1932 年 12 月)

春山行夫「ジョイスの三著」(『文学』4、1932 年 12 月)

**【1933 年】**(昭和 8・22 歳) 詩 18 篇、散文 2 篇、翻訳詩 3 篇、翻訳散文 1 篇  
発表

◇1 月 詩 3 篇『椎の木』。「憑かれた街」・「波」・「雲のやうに」。いずれも『椎の木』2-1、1933 年 1 月 1 日。

◇1 月 「冬の詩」(『今日の文学』3-1、1933 年 1 月 1 日)  
『左川ちか詩集』(昭森社、1936 年)には「毎年土をかぶらせてね」と改題し再掲。

◇1 月 「冬の詩」(『マダム・ブランシュ』4、1933 年 1 月 10 日)再掲。初出原題「鐘のなる日」193212。  
同月『今日の文学』発表の同名詩「冬の詩」とは別の詩。

◆2 月頃 伊藤整の次男礼が生まれるとき(2 月 14 日生)、伊藤整の母タマが手伝いで上京。貞子と整の前で「川崎の愛ちゃんのようにみっともない女

はだれも嫁のもらいてがない。そう思わないか」と話し、整は困ったような顔をして黙っていた。それより少し先に、二人の結婚をとりもった高谷キサから貞子に「にいさん（整）がまだそんなふうなら、別れてもいいんだよ」と話があったが貞子は決断できなかった（伊藤礼 1987p156、同 2007～08）。

△ 2月20日 同郷の小林多喜二虐殺。

◇ 2月 「目覚めるために」（『マダム・ブランシユ』5、1933年2月25日）

◆ 春頃 3月発行の富山県高岡市の女性詩誌『女人詩』9号を読み、感想を主宰の方等みゆきに寄せる（方等 1933）。これをきっかけに同誌同人となり、11号（193308）に詩「星宿」、14号（193409）詩「夏のをはり」、15号（193501）に書評「きりのはなたば」を寄稿。

◆ 3月 百田宗治編『詩抄 I』（椎の木社、1933年3月18日）に詩6篇収録。「眠つてゐる」「雲のかたち」「蛋白石」「神秘」「朝のパン」「記憶の海」

◇ 4月 「花咲ける大空に」（『マダム・ブランシユ』6、1933年4月15日）

◇ 4月 「雪の門」（『海盤車』2-8、1933年4月15日）

◇ 5月 「単純なる風景」（『椎の木』2-5、1933年5月1日）

◇ 5月 「春」（『椎の木』2-5、1933年5月1日）

◇ 5月 「舞踏場」（『貝殻』2-2、1933年5月1日）

◆5月7日 瀬沼茂樹最初の評論集『現代文学』出版記念会に出席。伊藤整、千葉亀雄、葛川篤、嘉村磯多、百田宗治、板垣直子、西脇順三郎、春山行夫らが同席。資生堂の3階で開催（瀬沼1954、百田1933）。

◆5月11日 友人根上律からモディリアニの画集（外山卯三郎編『新洋画叢書』4、金星堂、1931）を贈られる。同書には知人の三浦逸雄らが解説を寄せている。

△5月 同郷の鈴木信（2月25日生）が治安維持法容疑で検挙される。余市では、明治初年の旧会津藩士の入植に由来し、「会津長屋」と呼ばれた粗末な小屋が並ぶ一角、川崎家の向かい側に鈴木（黒川村25番地）が住んでいた。鈴木は兄川崎昇と小学校同級で、小林多喜二は小樽商業時代1つ先輩。友人の昇や伊藤整と同人誌『青空』の活動でも関わり、小樽商業時代からマルクス主義に接近し多喜二とも親しかった。多喜二の虐殺から3カ月後の検挙で1935年7月まで2年以上拘留された。1934年12月頃、整は豊多摩刑務所に赴き面会している（伊藤整1956Bp40、曾根1977p188～）。

◆5月13日 藤村青一、5月上旬に上京。ちかとは百田宗治宅で対面（島田2018B）。13日に椎の木社で開催された藤村を囲んだ小集會にちかは出席。乾直恵、楠田一郎、相田和夫、饒正太郎、高梨和夫、片岡敏、岡崎信男、高荷圭雄らが出席（『椎の木』2-6、無記名「消息」）。

◇6月 「五月のリボン」（『今日の文学』3-6、1933年6月1日）

◇6月 翻訳「媚態」（フランセス・フレッチャー小説）（『芸芸汎論』3-6、1933年6月1日） 約1年ぶりに翻訳を再開した。

◇6月 翻訳「花が咲みている」(ブラヴィック・インブズ詩)(『椎の木』2-6、1933年6月1日)

◇6月 翻訳「花が咲みている」(『海盤車』2-9、1933年6月5日)再掲。初出193306

◇6月 「むかしの花」(『新人早稲田』1-4、1933年6月20日)

◇6月 「春」(『マダム・ブランシュ』7、1933年6月25日)再掲。初出193305

◇7月 「暗い夏」(『作家』1、1933年7月1日)

ルイス・ブニュエルとサルバドール・ダリのシュルレアリスム映画『アンダルシアの犬』(フランス、1929年)の影響が瀬本阿矢により指摘されている(瀬本2011)。

◆夏 伊藤整と映画鑑賞。フランス映画『巴里祭』(1932年制作、1933年4月20日日本公開、帝劇、監督ルネ・クレール、キネマ旬報昭和8年度外国映画ベスト・テン第2位入選)と思われる。またはドイツ映画『制服の処女』(1931年制作、1933年2月1日日本公開、帝劇、監督レオン・ティネ・サガン、キネマ旬報昭和8年度外国映画ベスト・テン第1位入選)か。

妻貞子の実家から送られた金で蚊帳を買ってくると出かけた整が遅くに帰宅し、その金で「愛ちゃんと『巴里祭』っていう映画を見て来たんだ」と話した。それ以来、貞子はその映画の名前を聞いただけで虫唾が走るようになった(曾根1977p518～)。

◇8月 「星宿」(『椎の木』2-8、1933年8月1日)

◇8月 「他の一つのもの」(『椎の木』2-8、1933年8月1日)

◇8月 「星宿」(『女人詩』11、1933年8月10日)再掲。初出193308

◇8月 翻訳「詩」(ハワード・ウィークス詩)(『海盤車』2-10、1933年8月10日)

◆盛夏 浜松の詩誌『呼鈴』に寄稿していた塩寺はるよについて、主宰で同地の詩人浦和淳に手紙を出す。「塩寺さんの詩はたいへん清楚で気品があり交換の持てる作品ですね」との内容。以来浦和との間で短期間文通する(浦和1983)。『呼鈴』に「他の一つのもの」193310、「指間の花」193409を寄稿している。

◇9月 「むかしの花」(『椎の木』2-9、1933年9月1日)再掲。初出193306

◇9月 翻訳「寡婦のジャズ」(ミナ・ロイ詩)(『文学リーフレット』10、1933年9月10日)ロイの最初の邦訳。

◇10月 「他の一つのもの」(『呼鈴』12、1933年10月1日)再掲。初出193308

◇10月 「背部」(『海盤車』2-11、1933年10月5日)

◆10月31日 午後5時半、銀座の明治製菓4階で椎の木座談会に出席。岩佐東一郎、城左門、高祖保のテーブル。初対面の高祖とは帰りの電車で北海道や東京、兄昇の話をする。「焦茶の洋装のつつましやかな女流詩人がひとり」(高祖保1936、椎の木2-11後記に「椎の木座談会」告知)

◇11月 「背部」(『測量船』2、1933年11月1日)再掲。初出193310

◇11月 「葡萄の汚点」(『椎の木』2-11、1933年11月1日)

◆もともと目が弱く、この頃、飛蚊症を発症していたと思われる詩が散見する。

「雲に蔽はれた眼が午後の揺り椅子の中で空中を飛ぶ黒い斑点を見てゐる。」(詩「葡萄の汚点」1933年11月)

「斑点のある空気がおもくなり、ventilatorが空へ葉をふきあげる。」(詩「海泡石」1934年9月)

◇12月 「雪線」(『文芸汎論』3-12、1933年12月1日)

◇12月 散文「『椎の木』第二年の注意を惹かれた作品 続」(『椎の木』2-12、1933年12月1日)

◇12月 詩4篇を『行動』に再掲。「The street fair」再掲・初出193210。「雲の門」ママ・再掲・初出原題「雪の門」193304。「他の一つのもの」再々掲・初出193308・再掲193310。「雲のやうに」再掲・初出193301。いずれも『行動』1-3、1933年12月1日。

◆12月 北園克衛と流行文化誌『エスプリ』創刊。翌年4月の4号まで発行。銀座西8丁目の鋳業会館に事務所を構える。

「もうすっかり夜となつた銀座のオフィスの三階の暗い窓を背にして、一寸ピアズレエの少女を思はせる黒い天鵞絨の衣裳を着た左川ちかと、



編集プランを練ったり、遅い夕食をとつたことなどが想ひ出される。」  
(北園 1951)

「彼女は日中、北園克衛と、銀座うらのウナギの寢床のような、狭く、細長い粗末なオフィスの机で、広告文を書くような仕事をしていた。」(江間 1985p134)

◆クリスマスや年末近い頃、江間章子に時々エスプリ社から呼び出され、長い時間話をした。

「あなたの所から音楽が聞える」と左川さんは言ひ、「レコードかけてる所があるんぢやない？」などと尋ねられた。ひつそりした室内を見回しながら「違ふ、違ふ」と私は否定した。「どこかに、線が一寸混つてるんだわ」と私が言ふと、左川さんは「でも、あなたの所へ電話かけるといつでもそうなの」と言つた。」(江間 1935)

◆『エスプリ』編集の合間に北海道の山や海を懐かしく思う日記を綴る。「冬の日記」と題して『今日の文学』4-2(1934年2月)に掲載。

「十二月×日

しばらく山も海も見ない。山が見たくなつた。風が吹くと何も彼もそのままにほつといて家へ帰りたいと思ひます。真暗な北の海の潮鳴りがきこえてくるやうに思はれます。電車の音が知ら。やつぱり潮鳴りです。

貝殻を一杯もつてゐたことがありましたが今ほしいと思ひます。葉巻の空箱に、長い間かかつてためたのを。赤いのや、光るのや、丸いの、尖つたの、みんなやつてしまつた後なのに。

幾年か昔に逆もどりしさうに海がなつかしくてたまりません。地面が

あがつたり下つたりしてゐるやうに思はれる潮鳴り。白い波頭をおしたてて進んで来たり、すつと引いて行つた後のしめりや、荒れて、荒れて、ゴンゴンと音が続いて、しぶきが霧のやうに重くかたまつて、いつも砂浜に立ちこめてゐましたけれど。死んだやうに動かない雪に埋つた街のかたすみで、狂ひまはつてゐる海。あの海の音のする家へ明日にでも荷物をかたづけて行きさうに、街を歩きながら海のことなんか想出してゐます。

もう賑やかな通りを歩くのが厭になつた。毛皮や、外套や、飾窓や、笑ひ声でいつぱいになつてゐる舗道は何だか少し私にはまばゆすぎるやうに思はれます。《エスプリ》がやうやく校了。ちよつと、面白い雑誌になりさうです。売れるか知ら、紙屑が褐色の落葉と共に風に追ひたてられて、街がうすよごれて来る頃です。

十二月×日

冷たいので電燈に手をかざして温めました。とてもきれいなのに気がつきました。薄くなつて血管のふくらんでゐる赤い指。拡げたり揃へたりしてゐたら合弁花冠のやうに美しく咲いておりました。大切にしようと思ひました。

花屋の花だの他家の庭の花を美しく思つたり、欲しくなつたりばかりしてゐる私。

夜更かしをしては西洋の音楽家の伝記を読んでおります。えらい人ばかりです。それはおとぎばなしを読んでゐるやうに面白い。」(散文「冬の日記」1934年2月、全文)

◇12月 散文「ノエルを待ちつつ」(『エスプリ』1、1933年12月15日)  
後記「ノエルを待ちつつ」欄に「s.s.c.c.」の署名で発表。原文無題。発行人川崎愛。

◆12月 中村千尾にエスプリ創刊号を渡す。中村とは新宿の武蔵野館前にあったフランス屋敷で時々お茶を飲み、日常のことや兄、男性詩人のことなど親しく話をした。恋をしていたようだと言ったと中村は感じた。のちにその相手は伊藤整であったと小松瑛子宛書簡に中村は記した(中村 1962、小松 1972p72・84)。

「川崎昇は、にがい顔になり、「さあ、勉強、勉強」ということになる。  
「兄ったら本を読め読めってうるさいのよ。だから女はだめなんだって」  
(小松 1972Ap72)

◆この頃 衣巻省三がエスプリ社事務所にしばしばちかを訪ね、ネクタイの趣味などを褒められた。ちかは鉛筆でテーブルを叩いており、衣巻は詩作をしていたのではと回想する(衣巻 1936)。「衣巻さんは、お洒落なのよ。ダンディなひとよ。」と江間章子に話した(江間 1985p121)

◆1933年以降年月不明 衣巻とのちに今野竹一夫人となる女性の3人で酒を飲み歌を歌う。衣巻に「貴方はチャック・オーキーみたいね。」と話した。ちかはそのとき歌を歌い、さすが水の江瀧子や小林千代子と同郷の学校出身だと衣巻は思った(衣巻 1936)。年月不明だが、衣巻からフォックス・トロットを習っている(散文「衣巻さんと詩集『足風琴』」1934年11月)。

◆1933年半ば～1934年頃か 江間章子にこれからは「歌になる詩」を書くと言ったと話す。別の折に阪本越郎は「小説を書けば、林芙美子よりも、うまいと思うなア」と話していた。

「私ね……もう、これからこれから詩を書かないつもり……小説を書くだろうと思うでしょ？ そうじゃないの……私、歌になる詩を書こうと思

う……」「彼女が『椎の木』に発表した、最近の詩に、それが現われていることを思った。いままでの彼女の詩と異って、牧歌的で、童画的でもあった。そのころ、私などの知らないところで、彼女に何かしら変化があったのかもしれない。」(江間 1985p50 ~)

※『椎の木』の牧歌的童画的な詩とは「春」(1933年5月)、「むかしの花」(1933年9月)あたりか。

#### < 1933年、ちかに関する主な文献 >

内田忠「<椎の木>の作家」(『椎の木』2-1、1933年1月)

片岡敏「作品批評 第二年第一冊所感」(『椎の木』2-2、1933年2月)

本山茂也「カイエ 《室楽》—ジェイムズ・ジョイス 左川ちか訳著」(『小説』3、芝書店、1933年2月)

**【1934年】**(昭和9・23歳) 詩19篇、散文7篇、翻訳詩2篇発表

◇1月 翻訳「眠れる者からの帰り」(ディヴィッド・ジョン詩)(『椎の木』3-1、1934年1月1日)

◇2月 散文「冬の日記」(『今日の文学』4-2、1934年2月1日)  
1933年12月の日記。

◆2月 「椎の木同人論 左川ちかの作品」と題して『椎の木』3-2(2月1日発行)で特集が組まれる。高祖保の企画。饒正太郎「左川ちかの作品」、柏木俊三「The street fair」、高松章「左川ちか論への序」、濱名與志春「CHAMBER MUSIC その他」、内田忠「序論的に」(外村彰2017)。

- ◇2月 散文「Chamber music」(『エスプリ』2、1934年2月5日)  
後記「Chamber music」欄に「s.s.c.c.」の署名で発表。原文無題。
- ◇2月 「プロムナード」(『闘鶏』3、1934年2月20日)
- ◇3月 「遅いあつまり」(『貝殻』3-1、1934年3月1日)
- ◇3月 「天に昇る」(『カイエ』6、1934年3月5日)
- ◇3月 「会話」(『マダム・ブランシュ』14、1934年3月10日)
- ◇4月 「遅いあつまり」(『苑』2、1934年4月1日)再掲。初出193403
- ◇4月 「会話」(『苑』2、1934年4月1日)再掲。初出193404
- ◇4月 散文「水晶の夜」(『椎の木』3-4、1934年4月1日)  
「阿部保のエスキース」欄に発表。阿部保の短評。
- ◆4月 『椎の木』3-4(4月1日号)に『左川ちか詩集』(椎の木社)近刊  
広告。編者百田宗治。ちかはその準備稿を一部用意していたが、結局刊行さ  
れることなく死去。1936年11月に伊藤整編『左川ちか詩集』(昭森社)が刊  
行された(島田2020A)。
- ◆春頃 妻子ある男性の子を身籠った根上律について、律と2人で育てたい  
と江間章子に話す。当時、律は立教大学水泳部の弟博と同居しており、博は  
このことを知らなかった。律は同年、芝の済生会病院で女兒を産んだ(曾根  
1977p508)。

「絶対に産むべきよ……私たち二人でその子を育てましよう、リッチャンに言ったわ……(略)私とリッチャンと、二人がお母さんになれば、子供を育てられないことはないわよね……」「リッチャンは決心したのよ……赤ちゃんを産むの……ただ、弟が真実を知ったとき、どんなに愕かって…怒るかって…リッチャン悩んでいるわ……可哀そうよ……でも、相手にはなんの負担もかけたくないというの……きっとリッチャンは弟と別れて、内職をして生きていくことになると思うわ……私も、それがいいと言ってるの……」(江間 1985p54～)

◆初夏 横浜へヨットに乗るため江間章子と出かける。男性に声をかけられた気分を害した江間に「こんなに晴れた日だからその人の心が浮き浮きしてゐたのでせう」と慰めた(江間 1935)。

◇5月 「メーフラワー」(『カイエ』7、1934年5月10日)

◇5月 散文「魚の眼であつたならば」(『カイエ』7、1934年5月10日)

◇6月 「果実の午後」(『椎の木』3-6、1934年6月1日)

◇6月 「天に昇る」(『ごろつちよ』1、1934年6月1日)再掲。初出 193403

◇6月 翻訳「POEM」(ハワード・ウィークス詩)(『文章法』3、1934年6月5日)再掲。初出原題「詩」193308

◇6月 「メーフラワー」(『小劇場』3-7、1934年6月25日)再掲。初出 193405

◆1934 年前半 東京の大森海岸で江間章子と暗くなる海を見ながらマルセイユやチリへ行く話をする（散文「明るい夢と江間章子さん」1935 年 8 月）。

◇7 月 「おなじく」（『日本詩壇』2-5、1934 年 7 月 1 日）再掲。初出原題「果実の午後」193406

◇7 月 「暗い唄」（『日本詩壇』2-5、1934 年 7 月 1 日）  
昭森社『左川ちか詩集』では「暗い歌」

◇7 月 「花」（『カイエ』8、1934 年 7 月 1 日）  
昭森社『左川ちか詩集』では第一章のみ収録

◇7～9 月頃か 「午後」（初出不詳、福井県丸岡・内田忠の雑誌『書帷』か、1 月創刊）昭森社『左川ちか詩集』に収録。

◆1934 年？盛夏 セーナ左岸、シルビア・ビーチのシェイクスピア・アンド・カンパニーのような本屋を銀座に開きたいと江間章子に話をする（散文「明るい夢と江間章子さん」1935 年 8 月）。

夏に福井丸岡の詩人内田忠へ出したちかの書簡（年月不明）にも同じ記述がある。内田とは直接の面識はなかったが、時折手紙のやり取りをしていた。

「……すっかり盛夏になりまして、舗道を歩いてみると、脳がぐらくらして倒れさうになります。それでも夏が好きで夏が好きでたまりません。そして夏といへば真赤なかたまりのひな罌粟を想ひます。またこの夏もどこへも行けさうもなく、働かなければなりません。海や山のことを話してをります。まるでいまにも行きさうに。たのしいのですけど、子供の頃のやうに。

銀座の毛皮屋がとても夏向きの店に変わりました。花と、植木と熱帯魚と金魚と、大きな水槽に金魚がたくさんをりますの。熱帯魚がほしくて、いつでものぞいて見てまいります。お金が出来たら、銀座のやうなところへ江間章子さんと店を出したいと話してますの。江間さんは帽子屋と写真屋、私は本屋、シルビアビーチの本屋のやうなの。早くお金が出来るといいと思ひます。そしたら内田さんもお客さまになつていらして下さいますやうに。……」(内田 1937)

◇ 8月 詩5篇を『詩法』に再掲。「POEM」再掲・初出原題「単純なる風景」193305。「花咲ける大空に」再掲・初出 193304。「星宿」再々掲・初出 193308・再掲 193308。「春」再々掲・初出 193305・再掲 193306。「憑れた街」再掲・初出 193301。いずれも『詩法』1、1934年8月1日。

◆ 1934年? 8月15日 山形縣東田川郡余目町の川村欽吾へ書簡。

「マラルメの紀念詩集たまはりましてありがとうございます。御礼がたいへんおくれてしまひまして。花葩のやうにレエスの卓上を飾って、ほんとうにうれしうございました。夏のお休みもだいぶすぎましたけど、楽しくおすごしでいらっしゃいますか。どうぞお元気でいらっしゃいますやうに。私はどこへも行かずに、ボンヤリして家におります。暑くなると壁にひろげられた世界地図をながめております。ちょっとの間、たのしいです。太陽が私たちにあまり近すぎるのでせうか。本も読めない程、私はなまけております。九月にはまたお元気なお姿にお目にかかることが出来ますことせう。御機嫌を祈上げます。さようなら」

※川村 1979 には 1930 年と注記があるが、住所表記や書簡内の書誌情報から 1934 年と推定した。



◆8月末 詩人江間章子、『セルパン』編集長の三浦逸雄・朱門（8歳）父子、フランスから帰国した小松清と弟子の少年、『セルパン』の編集者Nとカメラマンの8人で伊豆の式根島に350tの古い汽船で写生旅行。『セルパン』東京湾ルポの企画であった。

小松はアンドレ・マルロー『征服者』の校正中。企画に関わったらしい川崎昇が、江間と2人分切符をとり見送りに来た。

ちかは水色のピケに白い線の入ったセーラー服風の寒色の服装。

土曜夜8時に霊岸島船着場から出航。船内で江間と2人、伊藤整の話を頻繁に熱っぽく口にした。夜は一枚の毛布で江間と「しゅもんちゃん」の3人で船内泊。

翌日、新島に到着、新島温泉ホテルで宿泊した。浴場でちかは兄の話をするなどご機嫌だった。旅の目的は式根島だったが、浪が荒く一行は島へ渡ることを断念。江間と2人、浜辺で昼寝をした。「私、小樽の、暗い海しか知らないから、こんな明るい海、びっくりしたわ……また、来ましようよ」（江間 1985p37）

翌日夕方に出航、海が荒れちかたちは吐き続け眠った。このとき平然としていた江間を「女海賊」と呼ぶ。船内で一泊後、霊岸島に到着。小田急の祖師谷大蔵駅近くの家で編集者に送られ帰宅した（曾根 1977p526、江間 1941、江間 1985p9・18～39）。白い粉の出る軽石を拾い自宅の化粧箱に入れた（散文「私の夜」1934年11月）。

※『セルパン』8月号の企画「(ルポルタージュ・グラフィック) 東京湾外廊線をスクープする」、三浦逸雄「新島・式根島の白光」（『セルパン』42号、1934年8月）の続編企画と思われるが、天候不順もあって誌面に実現はしなかった。7月末には城左門、岩佐東一郎らが式根島を訪れている（岩佐東一郎「茶煙閑語」文芸汎論5-9、1935年9月）。小松清については、ちか「明るい夢と江間章子さん」（1935年8月）に記述あり。

◇8月 「夏のをはり」(『女人詩』4-14、1934年8月30日)

△8月半ば 全日本水上選手権大会(神宮外苑)で、新人根上博は800m自由型で世界新。1500m自由形で優勝し、日本長距離のエースになる。『セルパン』9月号に三浦逸雄が観戦記「全日本水上選手権大会記」掲載(『セルパン』43、1934年9月)。

◇9月 「海泡石」(『椎の木』3-9、1934年9月1日)

◇9月 「指間の花」(『呼鈴』20、1934年9月10日)

昭森社『左川ちか詩集』では一部が「1.2.3.4.5.」として収録。

◆秋 夜更かしする癖がつく。川崎昇のゴールデンバットを吸っていた(散文「私の夜」1934年11月)。

◇10月 「Finale」(『椎の木』3-10、1934年10月1日)

◆1934年10月11日 春山行夫へ書簡。『モダン日本』に掲載した「季節」のお礼。「いつまでもこんなではいけない」、勉強したいと意気込む。

「お便りたまはりましてありがたう存じました。先日モダン日本社から速達がございまして詩を十一月号に間に合はせていただきました。いつもながらご配慮のことほんとうにありがたうございます。詩がお金になりましたのは三度目でございます。威張りたいみたいなどもうれしうございます。みな春山さんのおかげでございます。はじめはいつかの若草と、それから行動と、こんどと、あの為替をもつて郵便局に行くときの気持は私にとりまして忘れられないものでございます。いつまでもこ

んなではいけないと思ふ心だけでございますけど、勉強いたしたく存じます。どうぞ今后ともよろしく願ひ申し上げます。

雨が降ると寒くて手なんかかぢかんでしまひさうになります。庭が大部荒れて、垣根から向ふの畑がすけて見えます。春に草と一緒にコスモスを摘んでしまひましたら、この秋は少ししかなくて、それが雨の中で開いたものですから色が薄いやうな気がいたしまして、花の少いのは悲しいやうに思ふときがございませう。自動車学校の方へ参りますと草に蔽はれた川があつて、杉の林の道があつて、其処を大きな声で話して歩くとたいへん気持がようございませう。お元気になりましたら、私共の方へもお出かけ下さいますやう。さようなら。」(島田 2019C)

◇ 11月 「素朴な月夜」(『樵の木』3-11、1934年11月1日)

◇ 11月 散文「衣巻さんと詩集『足風琴』」(『樵の木』3-11、1934年11月1日)

衣巻省三の詩集『足風琴』(ボン書店、1934年8月)を書評。

◇ 11月 「前奏曲」(『カイエ』9、1934年11月1日)

「いつの頃だつたか伊藤整君が左川さんの文章を私に示して、「この中に強烈な女性の肉体を感じないか」と言ふ意味のことを話されたことがありました。それは散文と言ふよりはほんの短い散文詩風な文章でありました」(乾直恵 1936)

※小松 A1972 (p70) はこの文章を「前奏曲」と推定している。

◇ 11月 「夏のをはり」(『レスプリ・ヌウボオ』1、ボン書店、1934年11月

1日)再掲・初出 193408

◇11月 「季節」(『モダン日本』5-11、1934年11月1日)再掲。初出原題「夏のをはり」193408

◇11月 散文「私の夜」(『詩法』4、1934年11月1日)

「また夜更かしをする癖がついてしまひました。隣の部屋からそつと兄のシガレットケースを持ち出してゴールデンバットを吸つてみると目が覚めて少しも眠くありません。おいしくもなんでもないのに煙草を吸つてぼんやりしてゐることが楽しいと思ふやうになりました。夜がどうしてこんなに好きになつてしまつたのでせう。空気がねつとりと湿つて窓枠や扉にのしかかつてくるやうな気がいたします。昼の間輝いてゐたものが全く見えなくなつたり、大地を叩くやうな音響が聞えてまいります。きつと明るい時、大勢の人が道を歩いた足音やおしやべりの声などが、ほのかな湿りと共に、まだ残つてゐるのではないでせうか。どこかで昼が吹き消された、ただそれだけのことなのでせうになんといふ變り方でせう。すべては死んでしまつたのではないかと思はれる程、無言の休息をつづけてをります。あらゆるものは夜の暗がりには溶けこんでしまひ、私の耳のそばでは針で縫ふやうな時間が経つばかりです。その中にちつとしてゐると、私自身も着物を脱いだやうに軽くなつて、がんばりも、理屈も、反抗や見栄もいつの間にか無くなつてほんたうに素直な善良な人間になるやうに思はれます。他人から投げられたどんな鞭だつて赦せるやうな気がします。誰かが泣いて見ろといへば大声をあげて泣くことも出来ます。私はいつも長い間かかつて集めたほこりだらけの石塊を出して遊びます。伊豆の島から拾つて来た白い粉の出る軽石や、黒曜石、瑪瑙のかけら、葉脈の浮いてゐる化石、アイヌが昔熊を射る時用

ひたといふ尖つた矢の目石など化粧箱に一杯たまりました。それらを着物の袖でこすつてみると、不思議に澄んだ光を出します。神秘的な夜がみんな一つの石ころの中に凝り固まつて入つてゐるやうな気がいたします。

それから又私は木の葉の色や海の暗さや眠つてゐる人のことを考へます。この世の中で一番恐ろしいことや凶悪なことが行はれるのも広い闇の中だといふことに気づきます。夜に向ふ側で、実際はもう起りつつあるのでせう。そしてそれを見張つてゐるのは私ひとりです。」(散文「私の夜」1934年11月、全文)

◇11月 翻訳「冥想」(ラルフ・チーヴァー・ダニング詩)(『文章法』5、1934年11月5日)

◇12月 「言葉」(『椎の木』3-12、1934年12月1日)  
母について。1916年の項参照。

◇12月 「堇の墓」(『文芸汎論』4-12、1934年12月1日)

◇12月 「落魄」(『海盤車』3-16、1934年12月1日)

◇12月 「シットウエルの<田園喜劇>について」(『レスプリ・ヌウボオ』2、ボン書店、1934年12月1日)  
イーディス・シットウエル著・北村常夫訳『田園喜劇』ボン書店、1934年2月)の書評。

◆1934年頃か? 中村千尾に聖フランシスの「小さき花」のようなものを書きたいと話す。

「ある日デパートの書籍部で彼女は書棚から聖フランシスの「小さき花」を取り出して、一生に一度は自分もこう云うものを書きたいと思っていると真剣な表情で話したことがあった。彼女から文学への希望らしいものを聞いたのはその時だけだった。」(中村 1962、小松 1972p84)

「これは信仰の書であり、聖女小さき花のテレジア伝記である。(略)「小さき花」は天国から薔薇を撒く聖女といわれている。詩の中で殆ど、信仰について触れていない左川ちかであったが、(略)天国で「花などの間をゆくとき」という詩をかきつづけていることだろう。」(小松 1972Ap84～85)

#### < 1934 年、ちかに関する主な文献 >

『椎の木』3-2「特集左川ちかの作品」(1934年2月)→饒正太郎「左川ちかの作品」、柏木俊三「The street fair」、高松章「左川ちか論への序」、濱名興志春「CHAMBER MUSIC その他」、内田忠「序論的に」  
山村西之助「フオオヌの森にて」(『椎の木』3-6、1934年6月)  
北園克衛「若き女性詩人の場合」(『今日の文学』3-7、1933年7月)  
泉芳朗「創刊號を讀んで」(『ごろっちょ』3、1934年8月)

**【1935年】**(昭和10・24歳)詩11篇、散文5篇、翻訳詩2篇発表

◇1月「烽火」(『輝ク』3-1、1935年1月17日)

『輝ク』は女性作家長谷川時雨主宰。

◇1月「きりのはなたば」(『女人詩』5-15、1935年1月25日)原文無題。  
くらたゆかり詩集『きりのはな』(女人詩社、1934年11月15日)の誌上合評。くらた(1913～2006)は富山県高岡市の詩人。方等みゆき門下。

「私はあなたのそばでたえず、伴奏を続けてゐる海の響も空の色も知りませんが、しばらく振りで自分の生れた北国の吹雪の日の息づまる瞬間や雪明りの路を想ひ出してをります。(略) 私はあなたにお目にかかりたくなりました。私のいちばん愛してゐる思ひ出に就いて——馬櫓の鈴の音やゴムの長靴や、屋根の上に積る雪のことなど、それから山が近く見える日のこともお話したく存じます。さうすれば又私はあなたを育てた風景の中にも楽しく住むことが出来ませうし。」(散文「きりのはなたば」1935年1月、部分)

◇2月 「三原色の作文」(『海盤車』4-17、1935年2月10日)

1917(大正6年)の川崎家没落をモチーフの1つに。1917年の項参照。

◇2月 随筆「春・色・散歩」(『ファッション』2-3、1935年2月25日、ファッション社)

同号に詩友の藤村青一、山村西之助の執筆。編輯・発行・印刷人は押川春浪の近親にあたる柴山勝(筆名柴山燐子)。発行は芦屋。同誌は日本最初の月刊ファッション誌。

◆2月 滝野川区滝野川町1986番地の保坂家の家庭教師となる。アメリカンスクール在学中のフランス系保坂百合子(16歳)に日本語その他を教える。ちかは桜陽会東京支部顧問河崎なつに進路を相談。4月に百合子は河崎がいる文化学院女学部に入學した。河崎については1930年5～6月の項参照。

◇3月 「太陽の唄」(『るねつさんす』2、1935年3月1日)

翻訳「寡婦のジャズ」(ミナ・ロイ詩)(1933年9月)の影響。

## ◇3月 散文「童話風な」(『呼鈴派』1-2、1935年3月1日)

「明るい昼の間はぼんやりしてゐるのに、夜になると私の空つぼの頭の中へ、素晴らしく精密なエスプリが入つて来て、色々とうめあはせをしてくれたのです。夢の中では死んだ人も年齢をとりませんし、こはれたものも形があるし、時間的な、空間的なすき間のやうなものも感じられませんし、すべてが現在の進行をしてゐるといふことは喜ばしいことだと思ひます。

朝になると逃がしてはいけないことばかりのやうな気がします。

いまはあまり夢を見ません。見てもすぐに忘れてしまひます。疲れてゐるからではなく、夢を見ても最初に聞いて貰へる友達も居なくなつたし、そればかりか現実是我にとつてすべて夢だからです。」(散文「童話風な」1935年3月、部分)

※「すべてが現在の進行をしてゐる」とはちかの詩の特徴でもある。同時発表した「夜の散歩」とともにエスプリの喪失を告白している。

## ◇3月 「夜の散歩」(『椎の木』4-2、1935年3月1日)

「私は今歩いてゆく。他人の捨てたぬけ殻を拾ひ集めながら現実を埋めてゐたものはこんなむさくるしい残滓だけであつたことを思ひいつも空白な場所を充してゐると考へてゐた美しい羽毛は頼りにならない泥沼の上であつた。(略)私は嵐のやうな自由や愛情にとりまかれてゐたかつた。それなのに絆は断たれた。もはや明朗なエスプリは喪失し、大地はその上に満載した重さに耐えられぬ程疲労してゐる。」(詩「夜の散歩」1935年3月、部分)



「夜の散歩」は、完成度の高い散文であり、(略)伊藤整の「イカルス失墜」の世界を思わせるものがある。(略)この夜の散文詩を読んでいると、「私は小説をかきたい」といていた左川ちかの輝くような出発の言葉がきこえる。」(小松 1972Ap97)

◇4月 「花苑の戯れ」(『海盤車』4-18、1935年4月10日)

◆4月 アメリカ映画『泉』(監督ジョン・クロンウェル、7月1日、日比谷劇場で封切)の試写会に江間章子と出かける。新居格や戸川秋骨も同じ試写会にいた(江間 1935、新居格 1935)。

試写会の帰り、有楽町の電気倶楽部の広場に咲いていた月見草を摘もうとするが困いのため果たせず。銀座尾張町へ出る折りに、自動車の運転手に持っていた『セルパン』を渡した。銀座の資生堂2階で江間と休息中、向いの商店から出火。江間と手をつなぎ見物する。帰りの電車の中で「胸がどきどきする、どきがむねむねだ」と話す。

その晩、「私はきっと小説を書く」と話し、「明け方、恰度北国では、凍つた雪の上に粉のやうに軽い雪が、ふりまかれてゐる朝がありますが、そのやうな明け方、まだお月様が見える頃、ランデヴウするといふやうなもの」「人生とか何とかでなく、甘い、アイスクリームのやうに、舌の上に乗せるとすぐ融けてしまうやうな小説を」書きたいと話した(江間 1935、江間 1936B)。

△春頃 伊藤整、1929年秋の高山タミとの過去に関し、五十嵐重司から激しく糾弾される。妻貞子との間で家庭争議に発展。整はタミと会い、双方の協議は翌年5月頃までに及んだ(曾根 1977p487～、川西 2011)。

◇5月 翻訳「夜の想念」(R・S・フィッツジェラルド詩)(『文芸汎論』5-5、1935年5月1日)

◆5月 赤十字病院に入院していた阪本越郎を赤い撫子、青い勿忘草、れんげ、たんぽぽ、麦の穂など野の花を集め見舞う。青いセーター姿であった(阪本 1936)。1934年8月の新島旅行の時など、この頃は黒い衣裳から青や緑の服装に変わっていた。

「今でこそ、左川さんは草色のスエーターを着たりしてゐるのを見られるけどその当時、左川さんの用ひる色は黒ばかりであつた。」(江間章子 1935)

ちかと花。「左川さんは東京に在つては非常に「公園」を愛した。「いま、何んの花が咲いてるでせう？」と左川さんはすぐ考へはじめる。左川さんは花を愛しながら、それ以上にその花の咲いてゐる公園を好きであつたらしい。それは凡て、左川さんの眼だと考へる。左川さんのものを思ふ心はそのやうに大きなものであつた。」(江間 1936D)

◆5月 フランス映画『外人部隊』(1933年制作、監督ジャック・フェデエ、5月9日封切)を帝劇で観る。フランソワーズ・ロゼーを「あのやうに何でも知っているというのはいい」と江間章子に褒めた(江間 1936)。同映画はキネマ旬報昭和十年度外国映画ベスト・テン第2位入選作。

◆初夏 妻のいる春山行夫に片想いする江間章子を咎め、男が秘かに結婚していた自分の苦い経験を話した。男の名は伏せつつ、江間をいたわるやうにさびしそうに微笑んだ(江間 1985p90～)。1930年9月伊藤整結婚の項参照。この頃、春山と川崎昇との不和にも心を痛めていた(江間 1985p101～)。

◇6月 「海の花嫁」(『セルパン』52、1935年6月1日)

「暗い樹海をうねうねになつてとほる風の音に目を覚ますのでございます。／曇つた空のむかふで／けふかへろ、けふかへろ、／と閑古鳥が啼くのでございます。／私はどこへ帰つて行つたらよいのでございませう。／昼のうしろにたどりつくためには、／すぐりといたどりの藪は深いのでございました。／林檎がうすれかけた記憶の中で／花盛りでございました。／そして見えない叫び声も。／／防風林の湿つた径をかけぬけると、／すかんぼや野苺のある砂山にまゐるのでございます。／これらは宝石のやうに光つておいしうございます。／海は泡だつて、／レエスをひろげてゐるのでございませう。／短い列車は都会の方に向いてゐるのでございます。／悪い神様にうとまれながら／時間だけが波の穂にかさなりあひ、まばゆいのでございます。／そこから私は誰れかの言葉を待ち、／現実へと押しあげる唄を聴くのでございます。／いまこそ人達はパラソルのやうに、／地上を蔽つてゐる樹木の饗宴の中へ入らうとしてゐるのでございませう。」(詩「海の花嫁」1935年6月、全文)

※回想の余市の風景。余市南部の登地区にあった川崎家の林檎園から砂丘、町の中心部黒川町の鉄道、そして海岸沿い大川町から臨む日本海へと鳥瞰を交え視点が北上している(島田2019Bp222～)。

◇6月 翻訳「谷間の方へ」(ノオマン・マクロード詩)(『日本詩壇』3-6、1935年6月1日)

◇6月 散文「樹間をゆくとき」(『椎の木』4-5、1935年6月1日)  
夜の散歩に関するエッセイと『椎の木』(4-4)を中心とした同人作品短評。柏木俊三「早春」「稲妻(4-3)」、江間章子「田舎ぐらし」、平野仁啓「乖離」、内田忠「旧友との一時」、内山義朗「思索(4-2)」「生活」、阿部保「屋根裏の職人」、高松章「三月の歌」、小高根二郎「石の歌」。

「眼鏡をかけてゐるといふことは物をはつきり見るためではなかつた。つまり顔の幅だけで物を見てゐると、現はれてゐる事柄だけに錯覚を感じそのものがどんな拡がりをもつてゐるのか、どんなふう湿潤してゆくかを知る前に現象それ自身の火花にごまかされてしまふ場合が多い。見ることは結果を知るのではなく、現象の中の一部分の終りに達するためである。こんなことを考へながら麦畑の中を歩いて行く。(略)眼鏡をはづした時のぼんやりした風景の中にも明瞭な美しさがあり、眼鏡をかけてゐる時ははつきり見えるものの中にも、ぼんやりしたよさがあるのに、誰れもが、たつた一つの鏡を覗いて、黒白をきめなければならぬと考へることは愚かだ。境界線を探すことではなく、その一本の線の両側の無数の伏線を、飛躍した視野の切断面にぴしりぴしりと、あはせてゆくことにあるのではないだらうか。(略)火の消えない煙草の吸ひ殻を私は踏みつける。私の先を誰れかももう歩いて行つたのだ。このたえまない自然の断続の中から、人為的なものをみつけることに彼の失敗があり、彼女の誤謬があつた。林の中に入ると今まで聞えなかつた風の音がやかましくきこえる。」(散文「樹間をゆくとき」1935年6月、部分)

△6月頃 宝塚歌劇団員の園井恵子の後援をきっかけに庁立小樽高女同窓会である桜陽会関西支部結成。園井は河崎ナツ宅(世田谷区成城449)や高女先輩宅を東京での常宿とする(岩手県松尾村編『園井恵子資料集』1991)。

◆6～7月 世田谷を写生して「森へゆく」とかいた絵の便りを江間章子に出す(江間1935)。

◇7月 「山に話してゐる」(『芸術科』3-7、1935年7月1日)

◆7月 伊藤貞子、2人の幼い子を置いて和田芳江夫妻の宅へ家出。ちかが

原因であった（伊藤礼 2006、同 2007～08）。

「窓から外を見ていると、滋が母ちゃんはまだなの、ずいぶんおそいねえと言う。母ちゃんをめっけに行こうと言う。…三十分おきに滋は母のことをきく。（略）礼をハンモックにして、滋と並んで寝ていて涙が出て止まらない。滋は不思議そうに見ていて、眼鏡を取ろうとする。父ちゃんは腹が立つのだと言うと、滋はそうをと言う。帰って来たら殴ろうと思う。又は、一生を共に生活する女として君しか考えていないのだから、どんなことでもきくから居てくれと言おうか。どうもありがたいとただ頭を下げようか。（略）礼がたまらない寂しい顔をしたのは夕方飯支度をしていた時だ。抱いて家中を歩いてやる。何も言えないだけ一番哀れだ。」（伊藤礼 2007～08、伊藤整のノートより）

◇8月 散文「明るい夢と江間章子さん」（『文芸汎論』5-8、1935年8月1日）

「魔法にかけられたやうに江間さんが笑へば私も笑ひ、快活にすればその真似をしてゐるうちに、私にないものが私の中にどンドン入つて来た為だらうとも考へるのです。」（散文「明るい夢と江間章子さん」1935年8月、部分）

※「人とその芸術」と題した同誌のコーナーで、江間は同号に「左川ちか氏」を寄稿。このシリーズは前7号の福田清人と永松定から始まり、9号では春山行夫と伊藤整。10号では岩本修蔵と北園克衛などと続いた。

◇8月 詩3篇を『詩法』に掲載。「海の捨子」、「風が吹いてゐる」、「太陽の娘」再掲・初出原題「太陽の唄」193503。いずれも『詩法』12、1935年8

月1日。

「揺籃はごんごん音を立ててゐる 真白いしぶきがまひあがり 霧のやうに向ふへ引いてゆく 私は胸の羽毛を掻きむしり その上を漂ふ 眠れるものからの帰りをまつ 遠くの音楽をきく 明るい陸は肩を開いたやうだ 私は叫ぼうとし 訴へようとし 波はあとから消してしまふ／私は海に捨てられた」(詩「海の捨子」1935年8月、全文)

◇8月 詩2篇を『短歌研究』に発表。「山脈」、「海の天使」(『短歌研究』4-8、1935年8月1日)。

「海の捨子」は伊藤整「海の捨児」への返歌、「海の天使」は「海の捨子」の対詩(島田2019B)。

「揺籃はごんごん鳴つてゐる／しぶきがまひあがり／羽毛を掻きむしつたやうだ／眠れるものの帰りを待つ／音楽が明るい時刻を知らせる／私は大聲をだし訴へようとし／波はあとから消してしまふ／私は海へ捨てられた」(詩「海の天使」1935年8月、全文)

△8月5～7日 根上博(根上律の弟)、日米対抗水泳競技大会で日本新記録などの活躍。神宮プール(神宮外苑)で開催。東京では姉の律と同居していた。

◆夏 この頃から腹部の疼痛に悩む。寝ていると背中が痛み、激しいときは夜中に散歩に出かけるようになる。夜の散歩については、詩「夜の散歩」(1935年3月)、散文「樹間をゆくとき」(1935年6月)参照。

◆夏 教え子の保坂百合子の家族たちと信州の岡谷・諏訪に旅行。出発前に

「信州にも林檎畑あるのかな？」と川崎昇に話す。諏訪湖が一望できる山寺に宿泊。胡瓜や茄子ばかりの献立に辟易しながら、湖畔を水彩でスケッチブックに描いていた。

帰京した晩、ちかと昇たち家族で明るく和やかな食卓を囲みながら山の献立の話をして笑う。これが最後の家族の晩餐となった。「いい日灼けだね。山はよかつたかい？」「それが大違ひ。すつかり痩せてしまったの。キリギリスになるところだつた」（川崎昇 1983）。

◆夏 百田宗治の家を訪れる。「相当に憔悴して血色が悪かつた。一夏胡瓜ばかり喰つて暮してゐたさうだ。「蟋蟀みたいに」と自分で笑つて言つた。」（百田 1936B）

◆9月 北園克衛ら『マダムブランシュ』とアルクイユのクラブ後、7月に『VOU』創刊。VOUクラブが2号発刊の9月に結成。ちかも会員となつたとの記述があるが（小松 1972Ap84、クリハラ 2006）、『VOU』の会員名簿の変遷を見る限り、参加は確認できない。

◆9月後半 信州旅行を終え、2週間ほど経った頃。夜の散歩から戻って庭先で動かず屈んでいるちかを、明け方に昇が発見する。「おなかが痛んで眠れないの、昨日も今朝も。」 だいぶ前から寝ていると背中が痛んだが、散歩をすれば気分がよくなると思つて出かけたと話す。「兎に角、診てもらはう、名医を僕が探す！」

早朝、昇は整のもとを訪ね相談する。「私は覚悟をきめ、伊藤整君の意見をきかうと思つてゐました。」（川崎昇 1983、江間 1985p115）

◆9月末 順天堂病院に4日間通院。川崎昇、検診後に岡田医師から専門病院での長期療養が緊急に必要なとの説明を受ける。どうしてこうなるまで放つ

ておいたのかと昇は言われたが、それまでちかは一度も苦痛を訴えなかった。

◆10月9日 西巢鴨の癌研究所附属康楽病院（現がん研究会有明病院）に入院。リボンのついた踵の高いパンプスをベッドの横に揃えて入院。担当は院長の稲田龍吉博士。

16日から11月2日まで日記をつける。入院当初は食欲あり、読み書き支障なく地下の物療室にも自分で足を運ぶ。内田百閒の随筆やキーランドの短編集などを読む。連日のように川崎昇（当時第一書房勤務）が見舞った。

22日に胃癌の末期症状と診断される。

※入院日は『左川ちか全詩集旧版』「年譜」では15日とあるが、病床日記の22日の記述に入院して2週間とあり、江間1936Aに従い9日とする。病名決定日はクリハラ2006では15日とあるが、病床日記の記述から22日とする。

◆10～11月 札幌から母チヨが上京、付き添い看護にあたる。兄昇を始め、教え子の保坂百合子、高女同級生の野沢郁、「お習字の青山先生の妹さん」、「中野のをばさん」、義姉クラと甥の奎、俳歌人小林恒子、「小野さん」、百田貞子（宗治の妻）、「三郎、康雄」ら親族友人たちが見舞う。余市の叔母（ウメ？）からは林檎が届いた。

百田宗治は「早く快れ、そして詩集を出さう」と手紙で励ました（百田1936C）。肺結核で病床にあった根上律からは見舞いの手紙をもらう。上京後の律は住まいを転々とし、妻子ある『万朝報』新聞記者（山森p40）との同棲生活に破れ1934年11月に女子を出産。同級の野沢郁らの世話になっていた（小松1972Ap69、曾根1977p506～、江間1985p54～56）。

◆左川ちか「日記」（部分）



十月十六日

朝早く窓をあけたら、ここの病院の門から葬式自動車が出ていった。煙のやうな雨の中を黒いかたまりが動きだすのを見た時、胸のどろきがとまったやうな気がした。外を見たことを悔いた。午後、青木先生が廻診のとき手術をしなくていいとおつしやる。手術をして胸の下の悪いところを切つて切りきざんで私を苦しめてゐた病気といふ蟲を征伐してもらひたかつたのに、残念で不安でたまらない。一日中あさの黒いかたまりが目について気分が悪い。

二十四日

今日一日どうして暮したのかしらと考へても何も考へられない程単調な気分が悪い日ばかりで、空を見ながらベットの上にあると、過ぎ去つたこともこれから来ることもみんな一つになつて、楽しくない。雲を見てゐたらムツソリーニの顔に見えたのでおかしかつた。(後略)

二十五日

物の言ひたくない日だ。午前中から眠つてゐると先生に起こされる。レントゲンの部屋へ行く為廊下へ出て階段を下りると、看護婦さん達が元気で明るくたち働いてゐるのが不思議にまぶしく思はれた。自動車の走つてゐる街路を見てゐたら駈け出したくなつた。百間先生の随筆の中に漱石の臨終のことが書いてあつて、死んだ漱石を解剖したら胃が破れて出血したのが腸にとつさりたまつてあつたさうだ。涙が出る程たまらなくなつた。(後略)

三十日

いい天気だ。ただそれだけで片方の目から涙が出てくる。朝飯をとるときに苦しきつたらない。午後からお腹のいたみが和らぐ。眠つてゐるうちに兄さんが来てゐた。余市の叔母がリングを送つてくれた話やら、色々元氣をつ

けてくれる。まはりの人達が仕事をなげすてて私の為に世話をしてくださるのに、私は病気をしてゐるのは自分でないぞと思つてゐる。どうしても自分の病気のやうな気がしない。早くなほりたい。世田谷のせまい食卓でみんなでごはんが食べたい。

◆10月25日～11月6日 富山県高岡市の詩人方等みゆきとくらたゆかり、東京・名古屋・神戸などを訪れ詩人たちと交流する。姉妹誌の女性詩歌誌『ごろつちよ』の坂本茂子、深尾須磨子、永瀬清子、英美子、佐多稲子、生田花世、竹内てるよ、町田トシコ、野長瀬正夫、福田正夫ら、10月30日に新宿オリンピックで歓迎会を開催する。出席者34名(方等みゆき1936、日野堯子1936)。ちかは入院中のため欠席した。

◆11月中旬 疼痛が続き衰弱が目立つようになり、病状悪化。「賀正 ウラノ南天畑 昭和十一年 元旦」との絵入りの賀状を書いていたが未投函に終わった。

「母さん泣かないで、死んでいくのが、わたしでほんとはよかったと思う。もしこれが兄さんだったら、姉さんも、奎(昇の長男：引用者註)もかわいそう。そして母さんもー」(小松1972Ap76)

◆12月 腹膜が冒されたことを川崎昇は知らされる。27日、「帰りたい」というちかの希望で年末年始の一時帰宅が許可され、世田谷の自宅に戻る。「それは絶望的な退院でした。」(川崎1983)

【江間章子の証言と回想】(江間1936A、江間1985)

時系列の記述がやや異なるので別記した。

江間証言1 ◆10～11月初旬 江間章子、川崎昇から葉書が届き、ちかの入

院を知る（江間 1985p111～）。何度か病院に見舞う。

入院当初、ちかは枕元にゴッホやシャガール、林義重の絵葉書を置き、画集を読んでいた。「私は、あなたが帰って行くのを、窓から見ていたのに、あなたは振り返ってくれなかった」との葉書が江間に届く。

1週間後、江間の母が縫った搔卷きを持って見舞う。「うれしいわ、お母さんにお礼を言って……まもなく冬が来るでしょ、とても有難いわ」と喜ぶ。ちかは、新刊の『文化の擁護 国際作家会議報告』（小松清編、第一書房、1936年）、『キイランド短編集』（前田晃訳、岩波文庫、1934年）を読んでいた。キーランドについて「これは平凡なことを書いているに過ぎないけれど面白い」と話す。

1ヶ月後に見舞いに行くと、鉛筆で日記を書いていた。「わたしはもう二度とこのやうな苦しい病気はしない」と話す。

青みがかっていたちかの顔が次第に人形のように透明になっていった（江間 1985p15）。

2ヶ月後、昏睡状態に墜ちた。

※国際作家会議など海外情勢に関心を持っていたのは三浦逸雄や小松清、春山行夫らの『セルパン』の影響か。

江間証言2 ◆長くない病院生活のあと、自宅へ移ったあとの「日曜日」川崎家を訪ねる。ちかは玄関わきの四畳半の部屋に寝かされていた。ちかは半年持たないと昇から話される。

「左川さん、早く元気になって……」「私も、そうなりたいわ……。また、江間さんと銀座で逢いたい……」「それまでに、もうひとつか、二つ、ちがうコーヒー店をみつけておきますよ。左川さんの気に入るような趣味のいい店を、ね。……」ちかはうれしそうに微笑んだように、私には見えた。」（江間 1985p114）

※江間 1985 のこの記述は、江間証言 1 の「1 カ月後」頃（江間 1936A）の状況に相当すると推定。11 月初旬か。以降も江間 1985（p113～）の回想記述は、自宅での見舞いの時期が川崎昇 1983 などの記述と日にちがずれている。

ただしちかの死直後に書かれた江間「詩集について」1936 では、退院は 12 月 27 日となっている。以後も江間の回想では場所は自宅とあるが、川崎の回想に従い江間証言 3 までは、実際は自宅ではなく病院での会話だったと推定する。

#### 江間証言 3 ◆「一カ月ほど後、初冬を感じる日」

「左川さん……」私がそっとよびかけると、彼女の視線が少し動いた。声を出して、応える気力が、ないようだった。隣のへやの居間で、昇が言った。「日ごろ、ぼくは思っていたんですよ。ぼくの人生からプラス、マイナスを計算してみて、ゼロになっても、最後に妹だけは、残ると……」（江間 1985p117）

※時期は 12 月初旬か。実際は病院での会話か。江間証言 1 の「二ヶ月後」（江間 1936A）の昏睡状態に相当すると推定する。

#### 江間証言 4 ◆自宅。「木枯らしが吹き始めた日暮れ」「歳の暮れ近い木枯らし」

「ちかはいっそう痩せて、すでに視線もさだまらない、呼吸しているだけの悲しい病状だった。「愛はもうよくわからないようです。意識がはっきりしたときに、会いたいひとがないかと訊いたのですが、ない、とはっきりいいました。」（江間 1985p118）

※ 12 月末と推定する。

江間証言 5 ◆自宅。江間章子、春の先駆け、早春に咲く白いフリーズの花束を持っていく。目が重くて開かないちは、「いい匂い」と小さく笑った（小松 1972Ap76）

※江間証言 4 と同じ日かその近くと推定する。

#### < 1935 年、ちかに関する主な文献 >

伊東昌子「女流詩人の旗」（『文藝汎論』5-5、1935年5月）

山村西之助「藝術手帖」（『椎の木』4-6、1935年7月）

江間章子「左川ちか氏」（『文藝汎論』5-8、1935年8月）

**【1936年】**（昭和11・24歳11ヵ月）詩2篇、散文1篇発表

◇1月「季節」（『海盤車』5-20、1936年1月1日）

「晴れた日／馬は峠の道で煙草を一服吸ひたいと思ひました。／一針づつ雲を縫ひながら／鶯が啼いております。／それは自分に来ないで、自分を去つた幸福のやうに／かなしいひびきでありました。／深い緑の山々が静まりかへつて行手をさへぎつてみました。／彼はさびしいので一声たかく嘶きました。／枯草のやうに伸びた鬣が燃え／どこからか同じ叫びがきこえました。／今、馬はそば近く、温いものの気配を感じました。／そして遠い年月が一度に散つてしまふのを見ました。」（詩「季節」1936年1月、全文）

※1935年夏秋頃の詩作、事実上最後の詩と思われる。デビュー作「青い馬」に始まり、最後の作品も「馬」が登場。

◆1月7日午後8時30分 自宅で死去。24歳11ヶ月。医師の往診が間に合

わぬまま、枕もとの昇と母に「みんな仲良く」（幼いころからの母の口癖）、  
「ありがとう」と言い遺して息をひきとった（川崎昇 1983）。

◆1月8日 晩に春山行夫、新宿の喫茶店で百田宗治に「川崎君の妹さんが  
亡くなりましたよ」と死を伝える。「けさ早く、自分の家で亡くなったそう  
です」（百田 1936A）

◆1月10日 祖師谷にて火葬。衣巻省三、岩佐東一郎、城左門、阪本越郎、  
春山行夫、江間章子らが参列。黒いマントを翻し、遅れて駆けつけた伊藤整  
の到着を待っていたように遺体が霊柩車に移された（江間 1981）。

阪本越郎、棺の上に眼鏡姿の写真を捜したが、見当たらなかった。出棺  
の際に棺の蓋をとって一同が拝んだとき、彼女の眉のあたりを垣間見た  
が、眼鏡がないのでちょっと左川ちかという感じを受けなかった（阪本  
越郎 1936）。

「薔薇にくるまつたなきがらはさながらオフエリヤ姫だつた。君の嫌いな  
電気の竈に這入つたときはストラビンスキイの火の鳥だつた。一時間  
ほどして出て来たとき、沢山の天使、——君は夕闇に立迷ふ白つばい無  
数の蝶々に化けてゐた——僕は一個の天使を空想してゐたのに。眼に見  
えないその蝶々が冷たい風に吹かれて僕の喉にとびこみ、以来僕は風邪  
に伏つてしまつた。」（衣巻 1936）

「彼女は男のやうな顔をして寝棺のなかにその足を延ばしてゐた。しか  
し彼女は女であつた。わかい女であつた。彼女が成し遂げたことが、或  
は成し遂げようとして、半ばで殆れたことが、どんな価値を持つてゐた  
か——そんなことはまるで知らないやうな、またさういふことは無関係

のやうな一人のわかい女として彼女は死んで行つたのだ。」(百田 1936C)

「彼女の死んだとき、私は大きな花屋に行つて白バラを買つた。シヨウウィンドーが曇つていたことを覚えている。そのバラは彼女の棺におさめられた。」(春山 1954)

「左川ちかの成長期には、彼女自身神を求めていたはずなのに、なぜか、その葬送は、儀式がなかった。詩人祭で、友人たちによって、世田ヶ谷の自宅からそのまま、火葬場へ送られたと江間章子は話してくれた。」信仰の書フランスの「小さき花」(天国から薔薇を撒く聖女)を思わせるように、春山たちは棺に白薔薇をいっぱいに入れた。(小松 1972Ap84～85)

「雑木林に柔らかな夕陽が洩れ、春のようにおだやかな日であった。遺族、『椎の木』同人など、二十人ほどがそこに集まった。整も貞子と一緒に少し遅れて駆けつけた。川崎昇は、自分の人生を棒に振っても妹だけは残したいと思っていたのに、といて唇を噛み締めた。」(曾根 1977p529)

棺が玄関を出る時、阪本越郎が急ぎ棺に近づき、ちかの年齢を読み取った。火葬場へ向かう霊柩車は、祖師谷大蔵の冬の雑木林の中で路に迷った。阪本越郎「霊柩車も、道を間違えることがあるんだなァ」。黒い服装の人は一人もおらず、みな平服のままだった。帰途、新宿駅で江間が降りると、衣巻省三が「このままでは、やり切れなくて、家へ帰れない」と言って、駅のわきのダンスホールの階段を登って行った(江間 1985p120～121)。

「北園克衛の姿が見えなかったのは、悲しくて出席したくなかったからにちがいない。」(江間 1985p119)

『『ちょうどもンクの絵に出てくるような人でした。声が細いが透きとおっていて、このごろの人のようにあまり話したがりません。口数の少ない人でした。黒い天鵝絨の洋服を着て、ブリッジのきいた眼鏡をかけていました。面長な顔にそれはよく似合って詩人という感じをよく表していました。』(略)話のふん囲気からして、北園克衛は、左川ちかに好感をもっていたらしい。ほんのり染められた顔は、古い女友達をしのんだなつかしさが、いくらかのはじらいもあって、私は胸があつくなってくる。(略)「僕はお葬式は大きらいだから」といって、窓の方をむかれた。」(小松 1972B)

△2月26日 2・26事件

◇3月 詩2編が『椎の木』に掲載。「季節の夜」、「夏のごゑ」再掲・初出原題「山に話してゐる」193507。いずれも『椎の木』5-3、1936年3月1日。すべて1935年夏の詩作という(椎の木5-3、百田編集後記)。

◇3月 散文「日記」(『椎の木』5-3、1936年3月1日)  
「原稿用紙に鉛筆で認めてあった」(椎の木5-3、百田編輯後記、193603)

◆3月 『椎の木』5-3が左川ちか追悼号となる。萩原朔太郎「手簡」、堀口大学「手簡」、竹中郁「手簡」、北園克衛「※」、山村西之助「左川ちかを憶ふ」、阪本越郎「野の花」、春山行夫「ペンシル・ラメント」、衣巻省三「沢山の天使」、山中富美子「左川氏を憶ふ」、江間章子「左川さんの思ひ出」、高祖保「われた太陽」、乾直恵「思ひ出すまま」、西脇順三郎「気品ある思考」、



中山省三郎「海の天使よ」、内田忠「線」、百田宗治「編輯後記」「椎の木社通信」

◆3月21日 叔母川崎ウメを祭主に川崎家の霊神として金光教余市教会にて合祀される。霊称は「川崎愛子姫之霊神」。現在は小樽教会に祀られている。

◆4月 石川県の詩人打和長江、詩「黒縁の写真―逝ける佐川ちかの霊に捧ぐ―」を『北陸毎日新聞』1936年4月8日に掲載。

「深夜、氷雨は朔風を濡らし、窓下の小川は水嵩ましてごぼごぼと流れる。／光なき窓のあるじの行儀悪さ、雲が、一杯飛びこんで来さうになつて、私は、もう、鉄道に乗つて、走れるだけ走つてゐた。／ムーランルーデュの風車は、激しく回転してゐやう／小田急のレールは、光れるだけ黝光するんだ／その日、君の黒縁の写真が届けられ、もう一度、東京へ出ると、言ひ残して来たのに君の生活は、色濃く消えていつた／美味だつた英語を食べて、もう、外人とは話せなくなつた君、ロンドンタイムスも、今は悲しみの夢／世田谷の、麦は、随分、伸び、だが霜柱を、踏みしめる気持―／さらさらとゆく、風は止み、雲は落ち／嗚呼、草々等を、押し分けて、何処へ水は流れる／氷雨に濡れた朔風よ」（打和長江「黒縁の写真」1936年4月、全文）

◆4月 江間章子、初めての詩集『春への招待』（東京VOUクラブ、1936年4月10日）に「à chika sagawa」と献辞。

※「これについて、ひとりも感想を洩らしてくれた人はいなかった。」と回想するが（江間1985p152）、実際には加藤一「春への招待 江間章子氏詩集」（『海盤車』22、1936年11月）が献辞に言及している。

◆5月 伊藤整の散文詩風小説「浪の響のなかで」(『文学界』3-5)でちかの死を踏まえ、詩人時代への訣別と自己告発を行う。擱筆は3月23日。島田 2020B。

◆5月30日 庁立小樽高等女学校で創立30周年記念行事の一環として慰霊祭挙行。教職員・在校生・同窓会員・遺族ら700余人出席。祭壇中央には遺影が飾られ、5年間に亡くなった職員・生徒・卒業生の名が読み上げられた(北海道庁立小樽高等女学校桜陽会 1936)。

◆6月 『海盤車』でちかの追悼特集。村野四郎「左川ちか子氏のために」(初出『書窓』2-6.1936.4)、江間章子「左川さんの追憶記」、田中克己「左川ちかノ詩」、加藤一「左川ちか氏のこと」

△8月 ベルリンオリンピックで根上博、水泳400m自由形で5位に入賞。

◆夏 ちかの遺骨は余市の川崎家の墓に埋葬された。かつて余市町美園墓地の川崎家墓地内の名もない石塊の傍らに卒塔婆がたっていたという。

△10月1日 伊藤整の妹優、死去。享年15歳。

△11月8日 高山タミ死去。28歳か。伊藤整は、タミとの関係と事件の顛末について、短編小説「鏡の中」(1937年7月)で仮名を用い執筆した。島田 2020C。

◆11月 『左川ちか詩集』刊行(伊藤整編集、発行人森谷均、昭森社、11月20日)。詩76篇収録。350部限定。三岸節子装画。夫の三岸好太郎は札幌出身で『椎の木』の表紙を描いていた。椎の木社で生前企画されていた詩集用

に準備していたちかの整理稿が、昭森社版に一部反映している(島田2020A)。

### 【1937年以降】

◆1937年4月 伊藤整「ブックレビュー 左川ちか詩集」(『北海タイムス』4月8日)

「近来北海道が東都の詩壇に送つた殆ど唯一の女流詩人であつた左川ちかが逝つてから一年余になる。左川ちかは明治四十四年余市町黒川に生れ、本名を川崎愛といふ。

彼女の兄川崎昇君と親交のあつた僕は、庁立小樽高女の一年生として汽車通学をしてゐた十三四歳の頃から見識つてゐた。後兄君のあとから上京して百田宗治氏の椎の木社に入って詩作することとなつた。

それは昭和四年の頃のことである。西欧の新精神の詩風が若い日本詩壇を風靡してゐた頃で、左川ちかもまたその一群に伍し、今までの日本の女流詩人とは全く違つた斬新なしかも感覺的に確実な才能を示す詩風でもつて顕はれ、一躍詩壇の注目の的となつた。

文芸レビュー、詩と詩論、椎の木、セルパン等の雑誌に、阪本越郎、春山行夫、北園克衛等とならんで異色ある作品を次々に発表した。余談であるが、松竹少女歌劇の小林千代子とは小樽高女で同期であると聞く。

詩壇のことおほむね文壇の片隅にあつて華やかに世に行はれないが、新詩壇における左川ちかの存在は非常に大きな未来を、有つてゐたことと、新しい詩に女性独自の感覺的根拠を与へたことにおいて、彼女の郷里が充分に誇りとしていゝほどのものであるのみならず、その死によつて日本詩壇の失ふ処もまた近い例を見ないほど大きなものであつた。

昭和十年から腸を病み、十一年一月七日死去した。死後その全作品が『左川ちか詩集』の名で昭森社から発行された。装幀挿絵等は三岸節子

氏の手になつた典雅な本である。また彼女にはイギリス新文学の代表的作家なるジョイスの訳詩集もあつて、それは昭和七年に椎の木社から発行された。『左川ちか詩集』東京市小石川区大塚坂下町一〇二昭森社発行、定価二円。】(「ブックレビュー 左川ちか詩集」1937年4月、全文)

◆1938年5月 伊藤整、長編小説『青春』(河出書房、1938年5月)でちかをモデルにしたと思われる「辻さよ子」登場。島田2020C。

△1941年10月1日 母チヨが世田谷の昇宅で死去。63歳。11月根上律、肺結核で余市にて一子を遺し死去。律は余市の両親のもとに戻っていた。31歳。前年に吉岡虎一と結婚したちかの妹キクは一時期、東京品川に住んでおり、中国に渡るまで時折川崎昇に連れられ伊藤整宅を訪ねていた(伊藤整『太平洋戦争日記』)。

△1945年8月21日 広島で被曝した園井恵子、死去。

◆年月不明 ちかの死後、伊藤整は「一生おれからはなれなかった。愛していたわけではない。」と妻貞子に語った(伊藤礼1987p156)。

◆1951年3月 伊藤整、随筆「文学的青春伝」(『群像』6-3)でちかに言及。

★1951年10月9日 叔母ウメが余市で死去。70歳。晩年は姪の吉岡キク夫妻と過ごし、死後金光教余市教会で祀られた(衣斐1986)。

◆1955年9～12月 伊藤整、自伝風小説「若い詩人の肖像」(『中央公論』)で「川崎愛子」登場。

◆1956年2月 伊藤整、短編小説「妨害者」（『週刊新潮』1956年2月26日号）でちかをモデルにしたと思われる「町子」登場。

△1956年8月 伊藤整、長編小説『若い詩人の肖像』（新潮社）を単行本化。

△1957年5月 川崎昇の妻クラ死去。52歳。伊藤整、悼詩「川崎くら子夫人を葬る詩」を『季節』2-4（10月）に発表。20数年振りの詩作であった。戦後、川崎昇は北海道で出版社川崎書店やデーリーマン社を創立し、多くの図書・雑誌を出版した。

△1969年11月15日 伊藤整、5月に胃癌の末期症状と診断され、10月20日に入院した豊島区上池袋の癌研究所附属病院で11月に死去。64歳。かつて巣鴨にあった癌研究所病院にはちかが胃癌で入院していた。

「二人で私の家で、私の意見を容れて、詩集の題をきめ よろこびあった、あの夏の日の林檎畑での君の面影が いま私をかなしませ 齢老いて遺された者のむなしさをかみしめるばかりです」（川崎昇 1972）

△1970年5月23日 伊藤整の文学碑が故郷の小樽市塩谷、通称ゴロタの丘に立ち、この日除幕式が行われた。「海の捨児」の冒頭2節を整自身が選び、石碑に刻まれた。発起人は川崎昇、田居（川崎）尚たち。石碑裏面の伊藤整履歴は整の遺志で川崎昇が撰した。

△1986年2月7日 妹吉岡キクが余市町で死去。69歳。

△1987年2月13日 兄川崎昇が東京で死去。82歳。

ちかについて「遠い記憶」（『左川ちか全詩集』葉、1983年）を書き遺した。

### <死去直後のちかに関する主な文献>

- 百田宗治「左川ちかの死」(『椎の木』5-2、1936年2月)  
 江間章子「詩壇の訃報」(『レツェンズ』1936年2月号[紀伊国屋書店月報])  
 江間章子「詩集について」(『VOU』6、1936年2月)  
 『椎の木』5-3(1936年3月)左川ちか追悼特集号  
 打和長江「黒縁の写真 - 逝ける佐川ちかの霊に捧ぐ - 」(『北陸毎日新聞』1936年4月8日)  
 『Etoile de Mer(海盤車)』5-21(1936年6月)左川ちか追悼特集  
 百田宗治「夭折した女詩人左川ちか」(『目 augen』1936年11月号/「詩集のあとへ」と改題し『左川ちか詩集』に再録、昭森社、1936年11月)  
 左川ちか著・伊藤整編『左川ちか詩集』(昭森社、1936年11月)  
 内田忠「左川ちかのこと」(『日本詩壇』5-3、1937年4月)  
 伊藤整「『左川ちか詩集』」(『北海タイムス』「ブックレビュー」欄1937年4月8日)  
 菊池美和子「<レエル・ド・モア>左川ちか詩集」(『純粹詩』2、1937年6月)

**謝辞** 今回の調査・研究では、地元関係者、文化財・行政・学校・文学・宗教関係者など多くの方々の協力を得た。感謝申し上げる。とくに盛昭史(余市町史編纂室)、本間達洋(桜陽会相談役)、玉川薫(市立小樽文学館)、田野美妃(本別町歴史民俗資料館)、東延江(旭川文学資料館)、大林浩治(金光教教学研究所)の諸氏(順不同)には深く謝意を表したい。今後も調査を継続していく。

### 引用・典拠文献

- 新居格「試写室で逢う人々」(『セルパン』52、1935年6月)  
 伊藤整「馬」(『青空』13、1924年4月)

- 伊藤整「海の捨児」(『信天翁』1、1928年1月1日)
- 伊藤整「言葉」『雲雀』(第二次『椎の木』2—6、1929年5月1日)
- 伊藤整「海の肖像」(『新作家』3—5、1931年7月／『生物祭』、金星堂、1932年／『伊藤整全集1』新潮社、1972年)
- 伊藤整「浪の響のなかで」(『文学界』3—5、1936年5月／『伊藤整全集2』新潮社、1973年)
- 伊藤整編『左川ちか詩集』(昭森社、1936年)
- 伊藤整「ブックレビュー 左川ちか詩集」(『北海タイムス』1937年4月8日／『未刊行著作集12 伊藤整』白地社、1994年)
- 伊藤整『青春』(河出書房、1938年5月／『伊藤整全集2』新潮社、1973年)
- 伊藤整「詩の運命」(『詩学』2—6、1947年10月)
- 伊藤整「文学的青春伝」(『群像』6—3、1951年3月／『伊藤整全集23』新潮社、1974年)
- 伊藤整A「妨害者」(『週刊新潮』1956年2月26日号／『伊藤整全集6』新潮社、1972年)
- 伊藤整B「若い詩人の肖像」(新潮社、1956年／『伊藤整全集6』新潮社、1972年) 本稿のテキストには講談社文芸文庫(1998年)を用いた。
- 伊藤整『太平洋戦争日記』1—3(新潮社、1983年)
- 伊藤礼『伊藤整氏こいぶみ往来』(講談社、1987年)
- 伊藤礼「父・伊藤整」(市立小樽文学館編『伊藤整生誕100年市立小樽文学館特別展記念講演会・シンポジウム「よみがえる伊藤整」全記録』、2006年)
- 伊藤礼「父母のこと(1)～(12)」(『月刊百科』536～547、2007年6月～2008年5月) ちかについては第2回。
- 乾直恵「思ひ出すま」(『椎の木』5—3、1936年3月／『左川ちか全詩集』森開社、1983年に再録)
- 衣斐テヲ「金光教と我が家」(『金光教小樽教会布教満九十年記念誌』1986年)
- 岩手県松尾村編『園井恵子資料集 原爆が奪った未完の大女優』(1991年)
- 内田忠「序論的に」(『椎の木』3—2「特集左川ちかの作品」、1934年2月)
- 内田忠「左川ちかのこと」(『日本詩壇』5—3、1937年4月／『詩のために』椎の木社、1940年／丸田桜子・橋野毬子編『書帷 内田忠回想特輯号』内田五郎発行、1984年に再録)
- 打和長江「黒縁の写真一逝ける佐川ちかの霊に捧ぐ一」(『北陸毎日新聞』1936年4月8日)
- 浦和淳「左川ちか氏のこと」(『左川ちか全詩集』「栞」、森開社、1983年)
- 江間章子「左川ちか氏」(『文藝汎論』5—8、1935年8月)
- 江間章子A「詩集について」(『VOU』6、1936年2月／西村将洋編『コレクション・都市モダニズム詩誌14 VOUクラブの実験』ゆまに書房、2011年に復刻)
- 江間章子B「左川さんの思ひ出」(『椎の木』5—3、1936年3月／『左川ちか全詩集』森開社、1983年に再録)

- 江間章子 C『春への招待』（東京VOUクラブ、1936年4月）
- 江間章子 D『左川さんの追憶記』（『海盤車』5-21、1936年6月）
- 江間章子「或る夏の思ひ出 式根島」（『少女画報』30-8、1941年8月）
- 江間章子「詩と俳句のあいだ5」（『朝日新聞』1981年5月31日）
- 江間章子「詩人としてこの世に生まれた女性—『ポエジー』というケープを肩にかけて逝く—」（『図書新聞』1984年1月1日）
- 江間章子『埋もれ詩の焔ら』（講談社、1985年）
- 小野夕穂・曾根博義・川崎浩典編『左川ちか全詩集』（森開社、1983年）
- 小野夕穂編『左川ちか全詩集新版』（森開社、2010年）
- 加藤一「左川ちか氏のこと」（『海盤車』5-21、1936年6月）
- 神谷光信『評伝和田徹三一形而上詩への道一』（沖積舎、2001年）
- 川崎昇 A「妹」（『青空』8、1923年4月）
- 川崎昇 B「日曜労働」（『青空』9、1923年7月）
- 川崎昇「帰郷抄」（『青空』13、1924年4月）
- 川崎昇「露店小情」（『アカシヤ』11、1924年9月）
- 川崎昇「ひとし君のころ」（『伊藤整全集』1付録、新潮社、1972年）
- 川崎昇「遠い記憶」（『左川ちか全詩集』「栞」、森開社、1983年）
- 川西政明「伊藤整の性と愛」（『新・日本文壇史』5、岩波書店、2011年）
- 川村鉄吾「詩人左川ちか回想」（『地球』68、地球社、1979年7月）
- 北園克衛「左川ちかと室楽」（『椎の木』1-10、1932年10月／『天の手袋』、春秋書房、1933年／『北園克衛全評論集』沖積舎、1988年／内堀弘編『コレクション・日本シュールレアリスム7北園克衛・レスブリヌーポーの実験』本の友社、2000年）
- 北園克衛「左川ちか」（『詩学』6-8「物故詩人追悼特輯」、1951年8月／『黄いろい楕円』、宝文館、1953年／『北園克衛全評論集』沖積舎、1988年）
- 衣巻省三「沢山の天使」（『椎の木』5-3、1936年3月／『左川ちか全詩集』森開社、1983年に再録）
- クリハラ再編「左川ちか略年譜」（『江古田文学』63「特集天才左川ちか」、2006年11月）
- 昭和女子大学近代文化研究室『近代文学研究叢書』76巻（2001年）
- 高祖保「われた太陽」（『椎の木』5-3、1936年3月／『左川ちか全詩集』森開社、1983年に再録）
- 小松瑛子 A「黒い天鵝絨の天使—左川ちか小伝」（『北方文芸』5-11、1972年11月／『江古田文学』63、2006年11月に再録）
- 小松瑛子 B「左川ちかと北園克衛」（『北海タイムス』1972年11月15日）
- 小松瑛子「海の天使 左川ちかの詩」（『ラ・メール』1、1983年7月）
- 金光教北海道布教史編集委員会『金光教北海道布教100年史』（金光教北海道教師会、1991年）



- 阪本越郎「野の花」(『樵の木』5-3、1936年3月／『左川ちか全詩集』森開社、1983年に再録)
- 阪本越郎『『樵の木』の人々について』(『詩学』16-10「詩壇100年史」、1961年9月)
- 島田龍「左川ちか関連文献目録稿・解説」(『左川ちか資料集成』東都我刊我書房、2017年)
- 島田龍A「左川ちか研究史論—附左川ちか関連文献目録増補版」(『立命館大学人文科学研究所紀要』115、2018年3月)
- 島田龍B「左川ちかを探して(1)左川ちか「硝子の道」と藤村青一「淡水と気温」」(『螺旋の器』2、2018年11月)
- 島田龍A「詩人の誕生—初期伊藤整文学と川崎昇・左川ちか兄妹」(『立命館大学人文科学研究所紀要』118、2019年1月)
- 島田龍B「海の詩人 伊藤整と左川ちか—「海の捨児」から「海の実」へ—」(『日本思想史研究会会報』35、2019年1月)
- 島田龍C「左川ちかを探して(2)春山行夫宛書簡から」(『螺旋の器』3、2019年4月)
- 島田龍「昭森社『左川ちか詩集』の書誌的考察—伊藤整による編纂態度をめぐって—」(雑誌投稿済、2020年春頃予定)
- 島田龍「詩人の終焉—左川ちかの死と伊藤整、「浪の響のなかで」から『左川ちか詩集』へ」(「文学史を読みかえる」研究会編『(仮)文学史を読みかえる・論集3』インパクト出版会、2020年春予定)
- 島田龍「詩人の罪と罰—伊藤整と左川ちか、「鏡の中」「幽鬼の街」から『青春』『幽鬼の村』まで」(上に同じ)
- 市立小樽文学館他編『若い詩人の肖像 伊藤整、青春のかたち』(1999年)
- 市立小樽文学館編『大野百合子遺稿詩集 雪はただ白く降りて』(小樽文学舎、2016年)
- 城左門「編集後記」(『文芸汎論』2-10、1932年10月)
- 世界映画史研究会『舶来キネマ作品辞典 戦前篇』(科学書院、1997年)
- 瀬沼茂樹『伊藤整』(冬樹社、1971年)
- 瀬沼茂樹「あとがき」『昭和の文学』(河出文庫、1954年／『完本・昭和の文学』冬樹社、1976年)
- 瀬本阿矢「左川ちかと映画-『暗い夏』と<アンダルシアの犬>を中心に-」(丸橋良雄『比較文化の饗宴』英光社、2011年)
- 曾根博義「伊藤整年譜」(『伊藤整全集』24、新潮社、1974年)
- 曾根博義「伝記・伊藤整 詩人の肖像」(六興出版、1977年、改訂版1981年)
- 曾根博義『新潮日本文学アルバム 伊藤整』(新潮社、1995年)
- 田居尚『蘇春記—素膚の伊藤整—』(岩崎書店、1976年)
- 武井静夫「後志歌人伝」(海鳴詩社、1975年)
- 瀧口修造「自筆年譜」(初出1969年／玉川薫他編『詩人と美術 瀧口修造のシュルレアリスム展』、瀧口修造展実行委員会、2013年)

- 外村彰「第三次『椎の木』(一九三二～三六)解題」(『第三次『椎の木』復刻版 別冊 解題・総目次・執筆者索引』三人社、2017年)
- 中野正昭『ムーランルージュ新宿座 軽演劇の昭和和小史』(森話社、2011年)
- 中村千尾「左川ちかの詩」(『葡萄』22、葡萄発行所、1962年7月)
- 登郷土誌作成委員会編『登郷土誌』(余市町登郷区会、1986年)
- 則武三雄編「内田忠年譜」『遺稿 内田忠全詩集』(丸岡町文化協議会、1972年)
- 林光『母親がかわれば社会がかわる 河崎なつ伝』(草土文化、1974年)
- 春山行夫「ペンシル・ラメント」(『椎の木』5-3、1936年3月／『左川ちか全詩集』森開社、1983年に再録)
- 春山行夫「左川ちか〈季節風〉」(『北海日日新聞』1954年8月9日)
- 日野堯子「方等みゆき、倉田ゆかり両氏歓迎会小記」他『ごろつちよ』14号(1936年1月)
- 藤村青一「淡水と気温—左川ちか女に一」(『仮説』2、1932年7月)
- 方等みゆき「後記」(『女人詩』10、1933年5月)
- 方等みゆき「旅日記」(『女人詩』18、1936年3月)
- 北海道小樽桜陽高等学校創立100周年記念誌部会『創立百周年記念誌』(2007年)
- 北海道小樽桜陽高等学校開校百周年記念事業協賛会『開校百周年記念誌』(2016年)
- 北海道庁後志支庁『未開地貸付台帳 余市郡 従明治一九年 至二十七年 乙七号』(『北海道国有未開地処分法完結文書 法第三条 貸付台帳(後志)』)(北海道立文書館)
- 北海道庁後志支庁『余市郡余市町大字黒川村土地連副図』(北海道立文書館、1921年)
- 北海道庁立小樽高等女学校校友会『華園』16「創立二十週年記念号」(1927年3月)
- 北海道庁立小樽高等女学校校友会『華園』19(1929年12月)
- 北海道庁立小樽高等女学校校友会『華園』20「二十五週年記念号」(1931年6月)
- 北海道庁立小樽高等女学校桜陽会『華園』「創立三十周年記念号」(1936年12月)
- 北海道庁立小樽高等女学校桜陽会『華園』21(1937年12月)
- 本別町教育委員会『本別町 学校の歴史』(1978年)
- 本別町立本別小学校『本別小学校68年の歩み』(1969年3月)
- 本別町立本別中央小学校『流れ 本別中央小学校10周年記念誌』(1979年3月)
- 満仁崎賢次「尋常科四年生—大正時代の本別の想い出」(『沖積土』3、1972年11月)
- 村野四郎「碑銘—左川ちか子氏のために—」(『書窓』2-6、1936年4月／「左川ちか子氏のために」『海盤車』5-21、1936年6月)
- 百田宗治「詩作法」(『椎の木』2-7、1933年7月)
- 百田宗治A「左川ちかの死」(『椎の木』5-2、1936年2月)
- 百田宗治B「編集後記」(『椎の木』5-3、1936年3月)
- 百田宗治C「夭折した女詩人左川ちか」(『目 Augen』1936年11月号／「詩集のあとへ」と改題し『左川ちか詩集』に再録／「左川ちかのこと」と改題し『私の綴方帖』に再々

- 録、大和出版社、1942年／『爐邊詩話』柏葉書院、1946年で内容増補し再々録)  
山中富美子「左川氏を憶ふ」(『椎の木』5-3、1936年3月／『左川ちか全詩集』森開社、1983年に再録)  
山森三平「詩人の街・そして海」(『想像する旅』西田書店、1989年)  
余市町立大川尋常高等小学校・渡部哲蔵編『大川尋常高等小学校開校五十年記念誌』(1933年9月)  
余市町立大川小学校・今井正一編『大川小学校創立七十周年記念誌』(1953年9月)  
余市町立大川小学校『潮風 開校百周年記念誌』(1983年11月)  
余市町立登小学校『のぼり 八十年の歩み』(1985年9月)  
余市町立登小学校『大松とともに 開校九十周年記念誌』(1995年9月)  
余市町立登小学校『松燈火 開校百周年記念誌』(2005年9月)  
無記名「編輯後記」(『今日の詩』5、1931年4月)  
無記名「椎の木の会消息」(『椎の木』1-3、1932年3月)  
無記名「消息」(『椎の木』、2-6、1933年6月)  
無記名「後記 椎の木座談会」(『椎の木』2-11、1933年11月)  
無記名「近刊予告 左川ちか詩集」(『椎の木』3-4、1934年4月)

島田龍 lh041958@gmail.com

17v00223@gst.ritsumeai.ac.jp

